

第184図 AT 95 上面造構の配置図(現代)

## 2. 遺物

### 分析の視点と方法

ここでは2ヶ年度分の調査によって出土した遺物をまとめて分析し、中世十三ヶ満における「十三ヶ学校地区の様相」として捉える試みを行う。そこで、ここでは主要な遺物を構成する中世陶磁器を中心に分析を試みる。なお、近世陶磁器について今回は省略している。

陶磁器が主体とする食器について消費地の様相を明らかにする場合、生産の場から流通に至る過程を重視する「種類」別の分類と使用の場を重視する「用途」別の分類を視点に置いた分析が必要である。そこで分析に当たって、原則的に口縁部計測法による計量分析を行い、組成比（構成比率）を算出している。口縁部計測法による計量分析については宇野隆夫氏による論考が詳しい〔宇野 1981, 1992〕。また、集計表には破片数計算法も併用して用いている。そこでは瀬戸・珠洲についてできる限り時期別に分類して示しているため、2時期にまたがる資料についてはそれぞれ0.5破片として配分して計算している。

分析の対象とした中世陶磁器の示す全体の年代幅は12世紀後半から15世紀中頃までを示しており、年代的にかなりの幅がある。前回の国立歴史民俗博物館報告〔国立歴史民俗博物館 1995〕では十三ヶ満の出土陶磁器の様相を遺構の変遷と遺物量の変化から、大きく中世前期（12世紀後半～14世紀初め）、中世後期（14世紀後半～15世紀中頃）としてその様相を捉えようと試みた。しかし、現時点では良好な一括資料がほとんどなく、また、時期差を示す層位資料もないことから、種類・用途別における食器組成の時期別変化を厳密に抽出すること時期尚早であった。そこで、今回は全体で種類別の食器組成を算出して、「十三ヶ学校地区の様相」としてまとめることとした。さらに陶磁器が構成する主要な瀬戸、珠洲、貿易陶磁について個別に分析している。なお、瀬戸、珠洲、貿易陶磁の分類・年代観について、瀬戸は藤澤良祐氏〔藤澤1982, 1991, 1995〕、珠洲は吉岡康暢氏〔吉岡1994〕、貿易陶磁は国立歴史民俗博物館の分類〔国立歴史民俗博物館 1993〕にそれぞれ依拠している。

また、もう1つの視点として取り上げたものは遺物の散布状況についての分析である。これは〈第VI章考察・遺構〉でまとめた遺構の配置と構成による空間構造の把握を考慮に入れた上で、遺物の散布状況の変化を読み取ることによって、十三ヶ満における調査地区ごとの相対的な遺構の性格を比較分析したり、個別地点での遺構の配置と構成、空間構造の把握を行うことが可能であると考える。

### 土器・陶磁器の構成比（第185図）

これは中世陶磁器を生産地による種類別で示したものである。まず、国産・貿易品別の比率を見ると、国産品72.7%，貿易品27.3%であり、貿易品1に対して国産品はその2倍半も占めている。その内訳は国産品が瀬戸・珠洲・瓷器系・瓦質土器・土師器、貿易品が青磁・白磁・青白磁・中国天目で構成されている。個別にみると、出土量の最も多いのは瀬戸の41.2%，次に珠洲の29.0%，青磁の20.8%である。

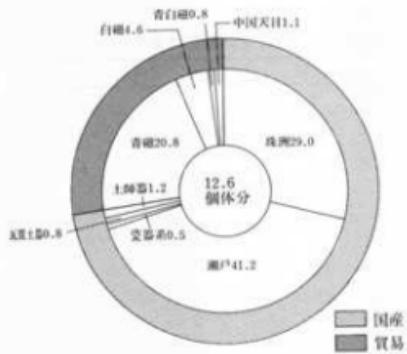
### 瀬戸製品の器種構成比・時期別出土量（第186・190図）

前述のように瀬戸製品は全体の4割も占めており出土量も多く、さらに細かな時期別の分類も可能であるため、調査地区における遺物量の時期別変化をよく表していると考えられる。まず、用途別に器種ごとの比率を見ると、食膳具は全体の84.0%で、その内訳は天目碗15.8%，碗29.3%，皿33.1%，盤5.8%である。貯蔵具は全体の4.6%を示し、壺・瓶がある。調理具としたものは全体の6.8%を示し、鉢3.3%，鉢目付大皿3.5%である。鉢皿・鉢目付大皿はここではその主要な機能・用途から食膳具と分けて、貯蔵具として記載した。その他、量的には極くわずかであるが、付加価値の高い特殊なものに仏花瓶1.3%，香炉3.3%がある。

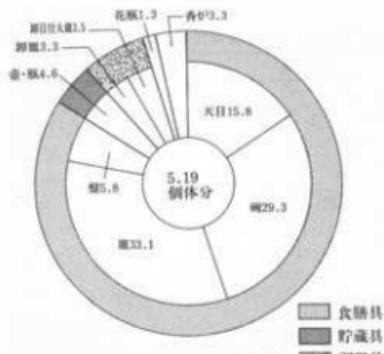
また、時期別の出土量の変化をみると、古瀬戸前I期から古瀬戸後IV期までの「窑窓」製品が出土しており、「大窓」時期に下るものは全くない。古瀬戸前期から中期前半のものは量的に極わずかだが出土している。これが中期後半から量的に増えていき、後期前半の後I・II期に最も増加する傾向を示している。実年代では14世紀後半から15世紀初めが最も遺物量が多いことになる。それが後IV期（実年代では15世紀中葉）になると、遺物量が極端に減少する傾向を示し、「大窓」時期（15世紀末以降）のものは全く出土しなくなる。

### 珠洲製品の器種構成比・時期別出土量（第187・189図）

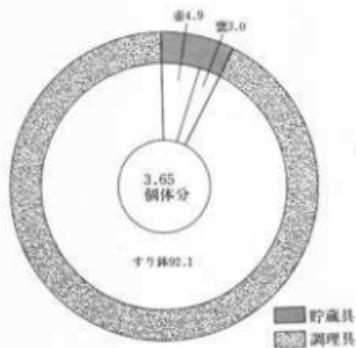
珠洲についても器種別構成比と時期別の出土量の変化を示した。まず、用途別に器種構成比を見ると、調理具のすり鉢92.1%，貯蔵具は壺4.9%，瓶3.0%であり、圧倒的に調理具のすり鉢の比率が高いことが分かる。さらに、時期別の出土量の変化を見ると、珠洲I期から珠洲III期まで若干量が見られるが、珠洲IV期になると急激に増加し、珠洲V期まで続く。実年代では12世紀後半から若干の出土量が見られ、14世紀後半から15世紀前半に最盛期を迎える。珠洲VI期と思われる15世紀後半代のものは認められない。



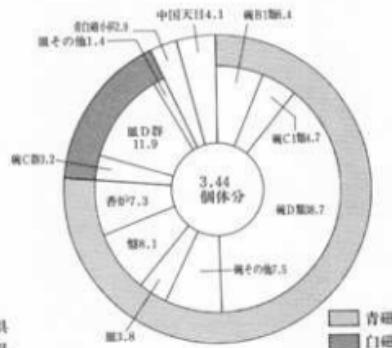
第185図 土器・陶磁器の構成比



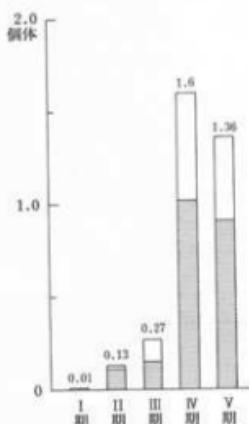
第186図 潤戸製品の器種構成比



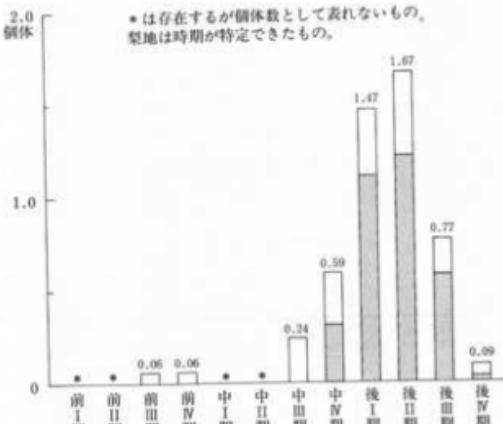
第187図 珠洲製品の器種構成比



第188図 貿易陶磁の分類別構成比



第189図 珠洲製品の時期別出土量



第190図 潤戸製品の時期別出土量

(グラフは全てAT94・95出土品集計データによる)

第38表 十三漢造跡出土遺物の種類器種別組成表（第1次・第2次調査出土品）

種類	器種	破片数	個体数
土師器	皿	9	0.15 [ 1.2% ]
瓦質土器	火鉢・風炉	23	0.1 ( 100 % )
	香炉	2	0 ( * % )
	小計	25	0.1 [ 0.8% ]
珠洲	壺	22	0.18 ( 4.9% )
	甕	31	0.11 ( 3.0% )
	壺・甕	60	0 ( * % )
	すり鉢	135	3.36 ( 92.1% )
	小計	248	3.65 [ 29.0% ]
磁器系	壺・甕	51	0.07 [ 0.5% ]
漸戸	天目茶碗	23	0.82 ( 15.8% )
	碗	48	1.52 ( 29.3% )
	皿	33	1.72 ( 33.1% )
	盤	25	0.3 ( 5.8% )
	壺・瓶	37	0.24 ( 4.6% )
	鉢	4	0.17 ( 3.3% )
卸目付き大皿		6	0.18 ( 3.5% )
柄付片口		1	0 ( * % )
花瓶		6	0.07 ( 1.3% )
香炉		2	0.17 ( 3.3% )
その他		3	0 ( * % )
不明		25	0 ( * % )
	小計	213	5.19 [ 41.2% ]
貿易陶磁 青磁	碗	113	1.97 ( 57.2% )
	皿	1	0.13 ( 3.8% )
	盤	12	0.28 ( 8.1% )
	壺	1	0 ( * % )
	香炉	1	0.25 ( 7.3% )
白磁	碗	11	0.11 ( 3.2% )
	皿	22	0.46 ( 13.4% )
	水注	1	0 ( * % )
青白磁	小杯	1	0.1 ( 2.9% )
その他	天目茶碗	4	0.14 ( 4.1% )
	壺	1	0 ( * % )
	茶入	1	0 ( * % )
高麗青磁	碗	1	0 ( * % )
	小計	170	3.44 [ 27.3% ]
總	計	716	12.6 [ 100.0% ]

個体数は全て口縁部片断による

\*は存表するが、個体数の比率が数値として表れないもの

第37表 十三ヶ造跡出土遺物の用途種類別組成表（第1次・第2次調査出土品）

用 途	種 類	破片数	個体数
食 講 具	土 簡 器	9	0.15 ( 2.0%)
	瀬 戸	129	4.36 ( 56.6%)
	貿 易 陶 磁	165	3.19 ( 41.4%)
	小 計	303	7.7 [ 61.1%]
貯 藏 具	珠 洲	113	0.29 ( 48.3%)
	壺 器 系	51	0.07 ( 11.7%)
	瀬 戸	37	0.24 ( 40.0%)
	貿 易 陶 磁	4	0 ( * %)
	小 計	205	0.6 [ 4.8%]
調 理 具	珠 洲	135	3.36 ( 9.06%)
	瀬 戸	11	0.35 ( 9.4%)
	小 計	146	3.71 [ 29.4%]
暖 房 具	瓦 質 土 器	23	0.1 [ 0.8%]
そ の 他	瓦 質 土 器	2	0 ( * %)
	瀬 戸	11	0.24 ( 49.0%)
	貿 易 陶 磁	1	0.25 ( 51.0%)
	小 計	14	0.49 [ 3.9%]
不 明	瀬 戸	25	0 [ * %]
	總 計	716	12.6 [100.0%]

個体数は全て口縁部計測法による

\*は存在するが、個体数の比率が数値として表れないもの

第38表 出土貿易陶磁一覧表

(第1次・第2次調査出土品)

種類	器種・分類	破片数/個体数	破片数/個体数
青磁	盤形碗I型	4/0 ( * %)	128/2.63 ( 76.4% )
	盤形碗II型	9/0.22 ( 8.4% )	
	盤形碗C I型	2/0.16 ( 6.1% )	
	盤形碗D型	23/1.33 ( 50.7% )	
	小碗	1/0.18 ( 6.8% )	
	碗不明	74/0.08 ( 3.0% )	
	皿	1/0.13 ( 4.9% )	
	盤	12/0.28 ( 10.6% )	
	蓋	1/0 ( * % )	
	香炉	1/0.25 ( 9.5% )	
白磁	白磁碗C群	2/0.11 ( 19.3% )	34/0.57 ( 16.6% )
	白磁碗D群	2/0 ( * % )	
	白磁碗不明	7/0 ( * % )	
	白磁皿A群	1/0 ( * % )	
	白磁皿D群	11/0.41 ( 71.9% )	
青白磁	白磁皿不明	10/0.05 ( 8.8% )	1/0.1 ( 2.9% )
	水注	1/0 ( * % )	
	小杯	1/0.1 ( 100.0% )	
中國	大口	4/0.14 ( 100.0% )	6/0.14 ( 4.1% )
	盃	1/0 ( * % )	
高麗	茶入	1/0 ( * % )	1/0 ( * % )
	碗	1/0 ( * % )	
合計		170/3.44 ( 100.0% )	

個体数は全て口縁部計測法による

\*は存在するが、個体数の比率が数値として表れないもの

第39表 出土珠洲一覧表

(第1次・第2次調査出土品)

器種	I期	II期	III期	IV期	V期	不明	合計
器	R			0.5	0.5	2	3
	T			(0.04)	(0.04)	(0.1)	(0.1) [ 2.7% ]
要				4.5	2.5	12	19
				(0.04)	(0.04)	(0.0)	(0.08) [ 2.2% ]
瓶				2.5	4.5	24	31
				(0)	(0.11)	(0)	(0.11) [ 3.0% ]
瓶甌				14	30	16	60
				(0)	(0)	(0)	(0) [ * % ]
すり鉢	3.5	3	5.5	33.5	28.5	61	135
	(0.01)	(0.13)	(0.27)	(1.56)	(1.21)	(0.18)	(3.36) [ 92.1% ]
合計	3.5	3	5.5	55	66	115	248
	(0.01)	(0.13)	(0.27)	(1.6)	(1.36)	(0.28)	(3.65) [ 100.0% ]

表中の数値：上段は破片数、下段は口縁部個体数

\*は存在するが、個体数の比率が数値として表れないもの

第40表 出土窓戸一覧表（第1次・第2次調査出土品）

器種	前Ⅰ期	前Ⅱ期	前Ⅲ期	中Ⅰ期	中Ⅱ期	中Ⅲ期	中Ⅳ期	中Ⅴ期	後Ⅰ期	後Ⅱ期	後Ⅲ期	後Ⅳ期	不明	合計	
天 目							3 (0.15)		6 (0.46)	4 (0.21)			10 (0 )	23 (0.82) / [ 15.8% ]	
平 面							0.5 (0.04)		13 (0.53)	19.5 (0.78)	4 (0.12)		31 (0.05)	46 (1.52) / [ 29.3% ]	
綠釉皿									2.5 (0.17)	5.5 (0.25)	10.5 (0.53)	1.5 (0.04)	3 (0.07)	23 (1.06) / [ 20.4% ]	
丸 盘							2 (0.19)	2 (0.19)	1 (0 )				0 (0.38)	5 (0.38) / [ 7.3% ]	
葵花半葉									0.5 (0.04)	0.5 (0.04)				1 (0.08) / [ 1.5% ]	
青磁小皿							0.5 (0.05)	0.5 (0.05)		0.5 (0.02)	0.5 (0.02)		2 (0.06)	4 (0.2) / [ 3.9% ]	
青磁深皿									4 (0.13)	1.5 (0.04)	1.5 (0.03)			7 (0.2) / [ 3.9% ]	
青磁深皿										1.5 (0.05)	0.5 (0.02)			2 (0.07) / [ 1.3% ]	
盤									1 (0 )	1 (0 )			14 (0.03)	15 (0.03) / [ 0.6% ]	
青 瓷	0.5 (0 )	1.5 (0 )					0.5 (0 )	0.5 (0 )	1 (0 )	2.5 (0 )	2.5 (0 )			9 (0 ) / [ * % ]	
瓶 子		1 (0.05)	1 (0.06)				1 (0 )	1 (0 )		1 (0.06)	1 (0.06)			22 (0 )	28 (0.24) / [ 4.6% ]
加 重									1 (0.03)	1 (0 )	1 (0.14)			1 (0 )	4 (0.17) / [ 3.3% ]
菊口付茶 大皿										2 (0.07)	2 (0.06)	1 (0.03)	1 (0 )	6 (0.18)	6 (0.5) / [ 3.5% ]
菊口付茶 口													1 (0 )	1 (0 ) / [ * % ]	
花 瓶				1 (0 )	1 (0 )		0.5 (0 )		1 (0 )	0.5 (0 )	0.5 (0.02)	0.5 (0.02)	1 (0.03)	6 (0.07) / [ 1.3% ]	
香 扉										1.5 (0.15)	0.5 (0.02)			2 (0.17)	2 (0.3) / [ 3.3% ]
燭 台										0.5 (0 )	0.5 (0 )			1 (0 )	1 (0 ) / [ * % ]
水 漆										0.5 (0 )	0.5 (0 )			1 (0 )	1 (0 ) / [ * % ]
合 子				0.5 (0 )	0.5 (0 )									1 (0 ) / [ * % ]	
不 明													25 (0 )	25 (0 ) / [ * % ]	
合 計	0.5 (0 )	1.5 (0 )	1 (0.06)	1 (0.06)	1.5 (0 )	1.5 (0 )	4 (0.24)	13 (0.59)	2 (0 )	33 (1.47)	42.5 (1.67)	17.5 (0.77)	3 (0.09)	91 (0.24)	213 (5.19) / [ 100.0% ]

表中の数値：上段は破片数。下段は口縁部個体数

\*は存在するが、個体数の比率が数値として表れないもの

## 貿易陶磁の分類別構成比（第188図）

貿易陶磁の分類別構成比を見ると、青磁が全体の76.5%、白磁が16.5%を占めている。青磁は白磁の4倍半も占めており、青磁の比率が圧倒的に高い。さらに特徴的なことを述べると、全体の38.7%を龍泉窯系碗D類が占めている。D類については「シャープな作りで灰色、透明感の強い釉のもの」と「鈍い作りで端部が玉縁状になるもの」の大きく2種類があり、型式差・時期差があると考えられる。年代的には前者を14世紀後半、後者を15世紀前半に比定される。また、この地区において龍泉窯系碗B1類の鍋連弁文碗が全体の6.4%出土している。これまで龍泉窯系碗B1類は町屋地区の調査では出土しておらず、十三湊の土星北側地区においてのみ確認されていることから、土星北側地区と町屋地区では消長時期に差が見られる。遺物の年代は13世紀後半から14世紀前半と推される。白磁では皿D群が全体の11.9%、碗C群3.2%を占めている。前者は15世紀前半、後者は14世紀後半と考えられる。

## 遺物の散布状況について

遺物の散布状況を分析する前操作業として、分析の対象となる調査地区ごとの遺構の配置と構成から理解される空間構造の把握を整理すると以下のようになる。

第1次調査（AT94）・第二地区：この地区は「館跡」の南面に位置し、十三湊を南北に分断する大土壘に挟まれた空間として認識される。内部空間は2本の柵囲区画の東西道路敷に挟まれて掘立柱建物に井戸が付随する屋敷地としての居住空間と想定される。遺構の消長時期は14世紀後半～15世紀中葉に当たる。

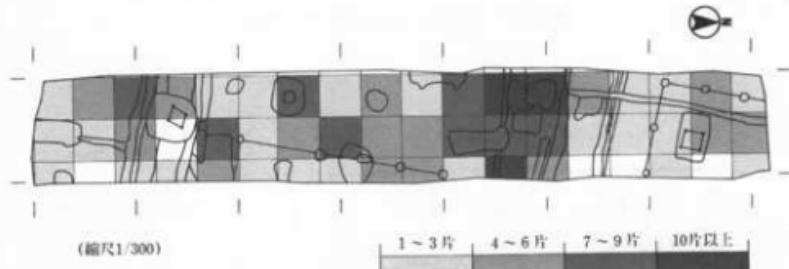
第2次調査（AT95）：この地区は最盛期には館跡主体部となる場所で、内部は区画遺構によって地割りされた中に掘立柱建物、大型堅穴遺構、井戸などの遺構の配置が見られる。12世紀後半から遺構の形成が見られることから、中世十三湊の成立当初から重要な位置を占める場所であった。十三湊が廃絶する15世紀中葉まで遺構の形成が見られる。

## 第1次調査（AT94）・第二地区

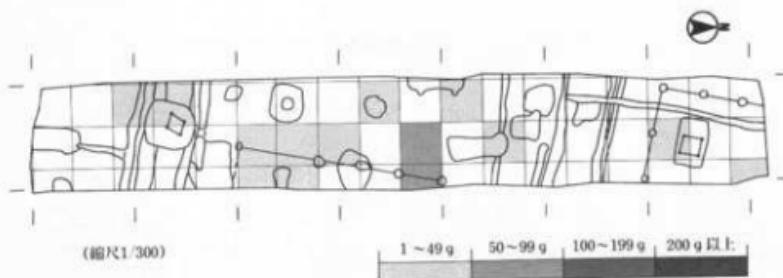
まず第191・192図で2m方眼による中世遺物の散布状況を示した。それによると、柵囲区画の東西道路敷に挟まれた空間は出土遺物の頻度が30%～70%と高い比率を示していることから、居住空間として積極的に利用されたことを遺物の面からも示している。第193図の出土遺物の接合関係を見ても、遺物は1m～7mの範囲で接合関係が見られることから、

遺物の移動距離はそれほど大きくなく基本的に現位置を保つものと考えられる。また、傾向としてよく表れていないが、柵囲区画の東西道路敷周辺は出土遺物の頻度が相対的に少ないことは道路構造という居住空間とは異なる意味を持った空間であると判断される。

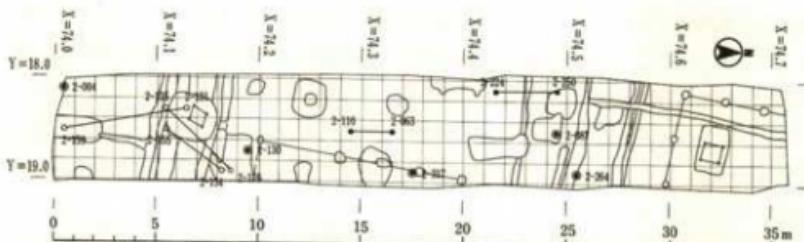
なお、第194～198図では中世陶磁器の種類・器種ごとの散布状況を示したものである。調査面積が狭いことから、陶磁器の種類・器種別での散布状況の偏りは認められなかつた。



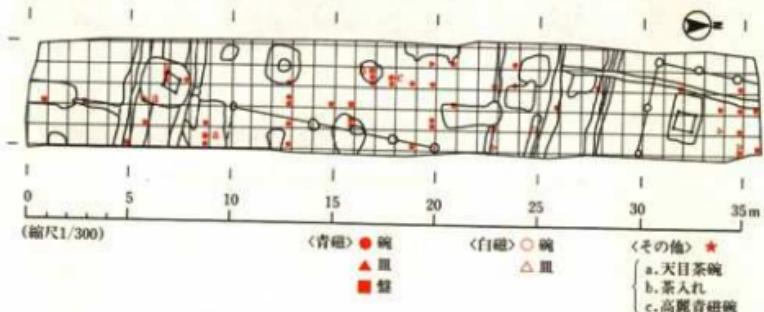
第191図 AT 94 II 中世遺物の出土散布図(破片数)



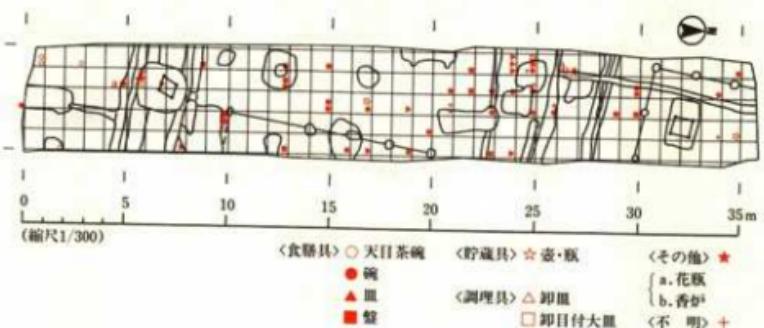
第192図 AT 94 II 鉄製品の出土散布図(重量)



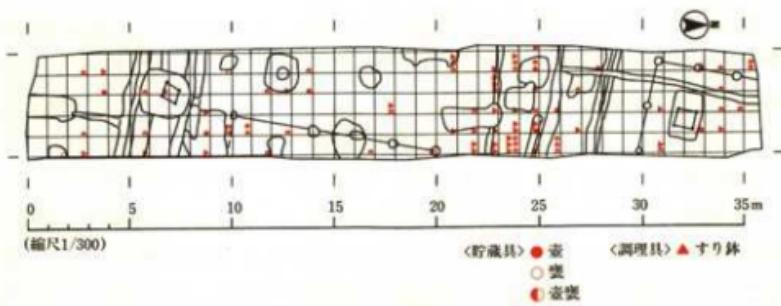
第193図 AT 94 II 中世遺物の接合関係



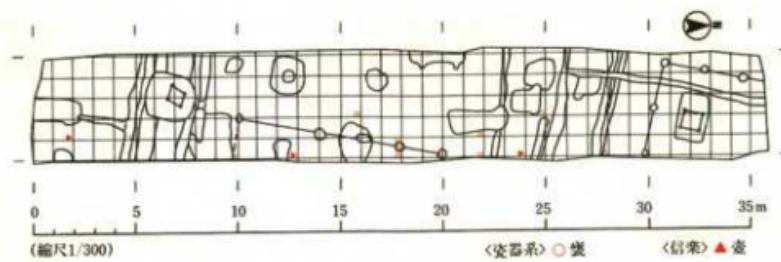
第194図 AT 94 II 貿易陶磁の出土散布図(破片数)



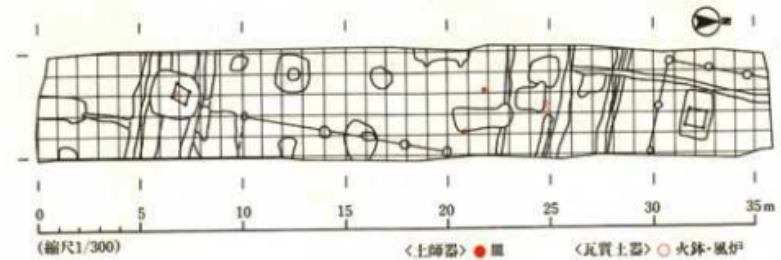
第195図 AT 94 II 窓戸の出土散布図(破片数)



第196図 AT 94 II 珠洲の出土散布図(破片数)



第197図 AT 94 II 瓷器系陶器・信楽の出土散布図(破片数)

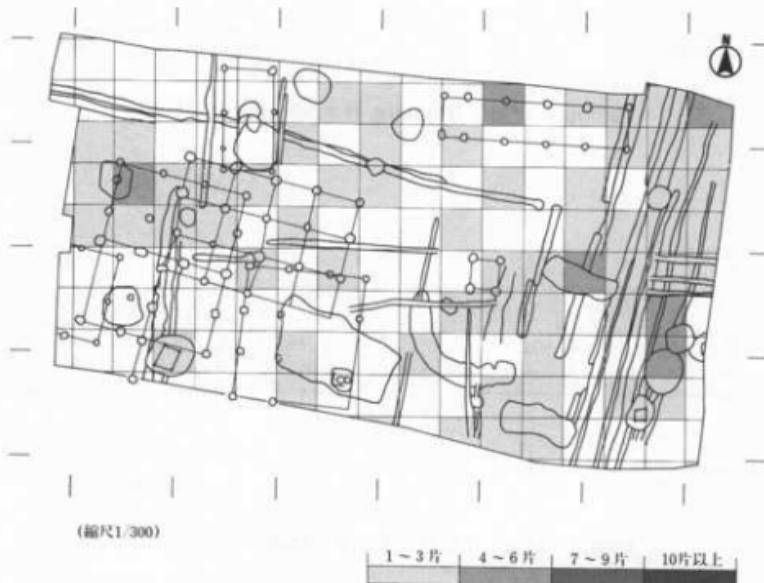


第198図 AT 94 II 土師器・瓦質土器の出土散布図(破片数)

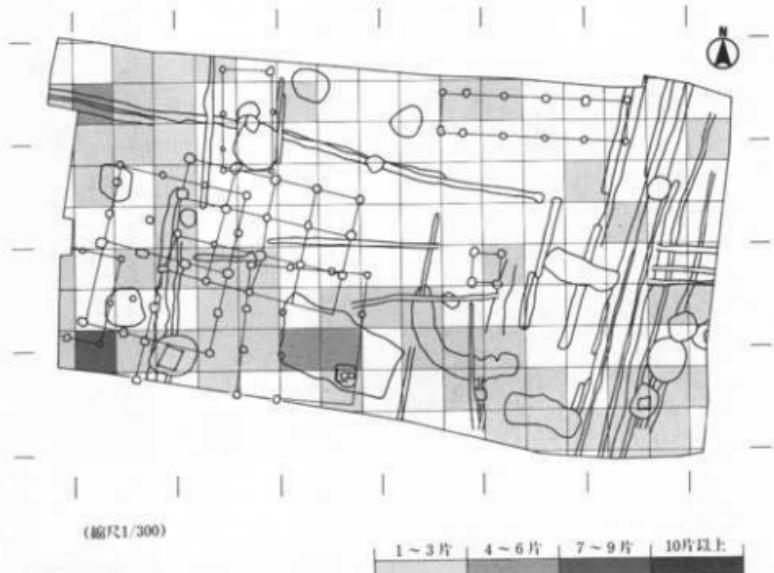
## 第2次調査（AT95）

第199～203図は2m方眼による中世遺物の散布状況を示したものである。第199図は第I層、第200図は第II層、第201図は第III層、第202図は第I層を除いた中世遺物全体、第203図は鉄製品の出土散布状況をそれぞれ示している。第199図のI層と第202図の第I層を除いた中世遺物全体の散布状況を比較した場合、散布状況が全く異なって表れている。これは本調査地区が現在も畠地として利用されていたため、第I層出土遺物は耕作によって、下層の遺物がそのまま上面に表れたものと判断される。第204図の出土遺物の接合関係では第I層接合遺物は移動距離が最大23mと大きいが、下層遺物の移動距離は最大17mと相対的に短いことを示した。以上のように調査区が耕作による搅乱の影響を受けていることを考慮に入れた上で、遺物の散布状況を見た場合、調査区の南西部に出土遺物の頻度が高いことを示している。これも第1次調査の傾向と同様に掘立柱建物、井戸、大型竪穴遺構など居住空間として積極的に利用されていたことを示すものと判断できる。

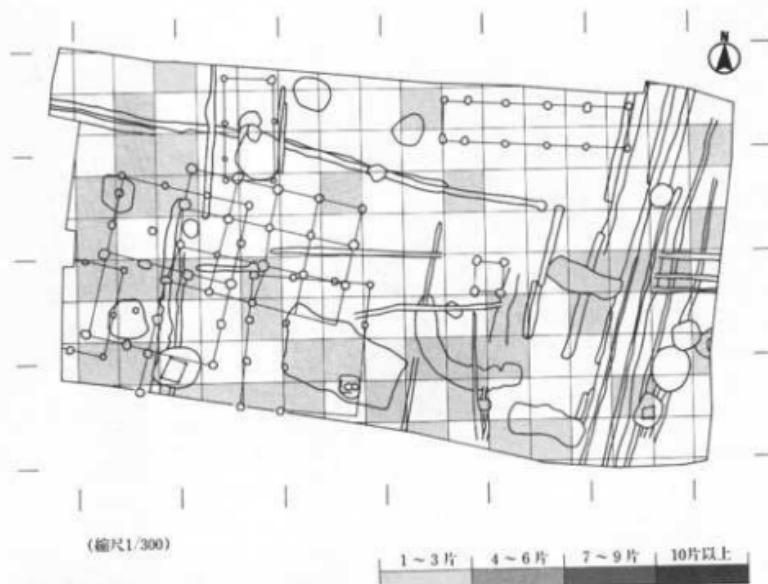
なお、第205～209図では中世陶磁器の種類・器種ごとの散布状況を示した。今後、調査面積の拡大を待って、「範跡」内部での陶磁器の種類・器種別の散布状況の傾向を読み取っていきたい。また、第210図は全体・調査地区ごとの遺物接合率を示した。



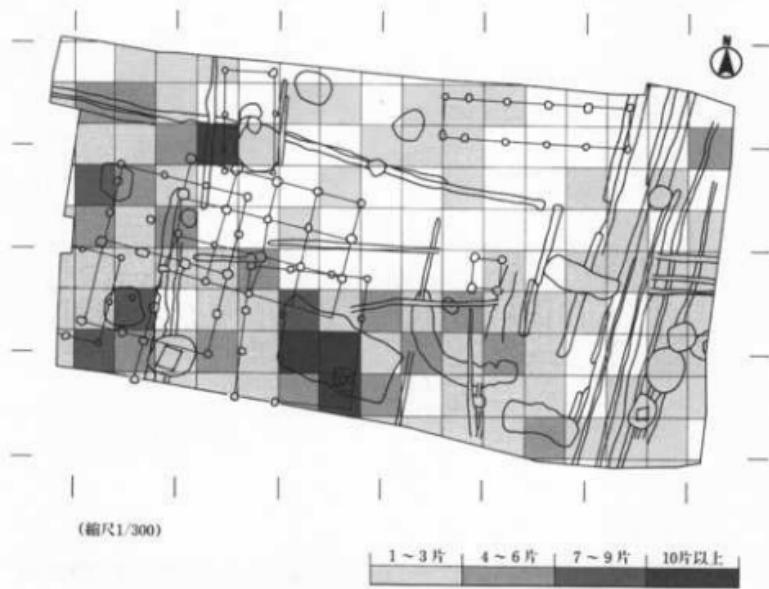
第199図 AT95 第I層：中世遺物の出土散布図(破片数)



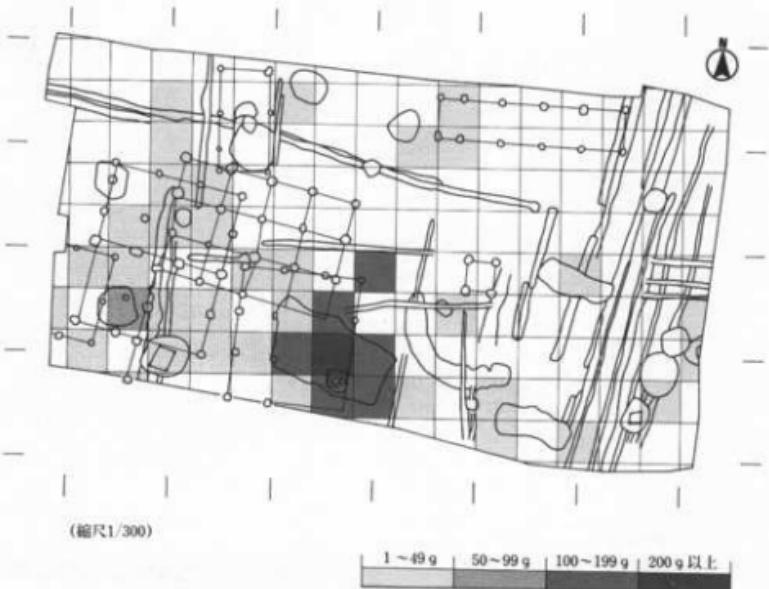
第200図 AT95 第II層：中世遺物の出土散布図(破片数)



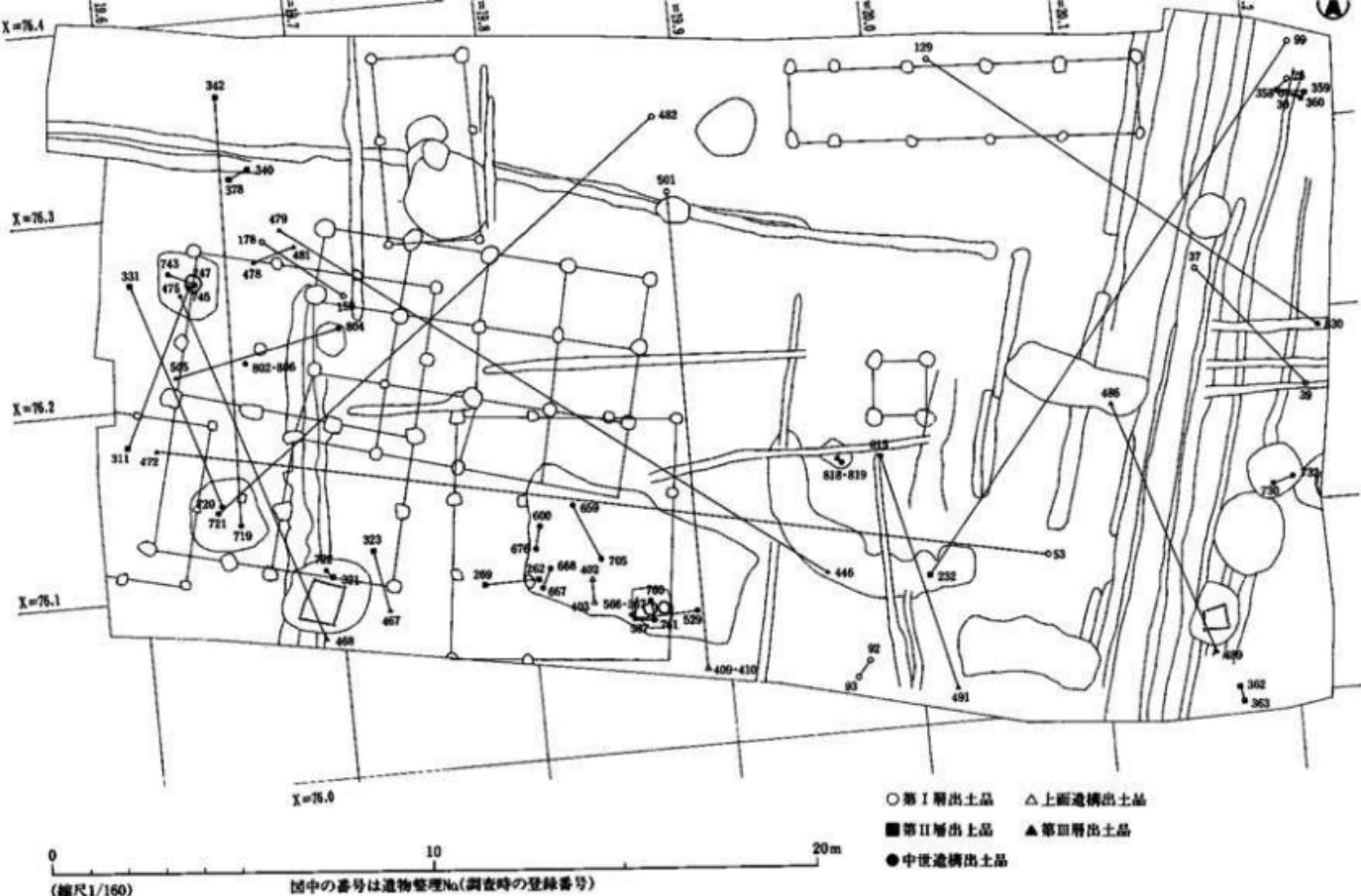
第201図 AT95 第III層：中世遺物の出土散布図(破片数)



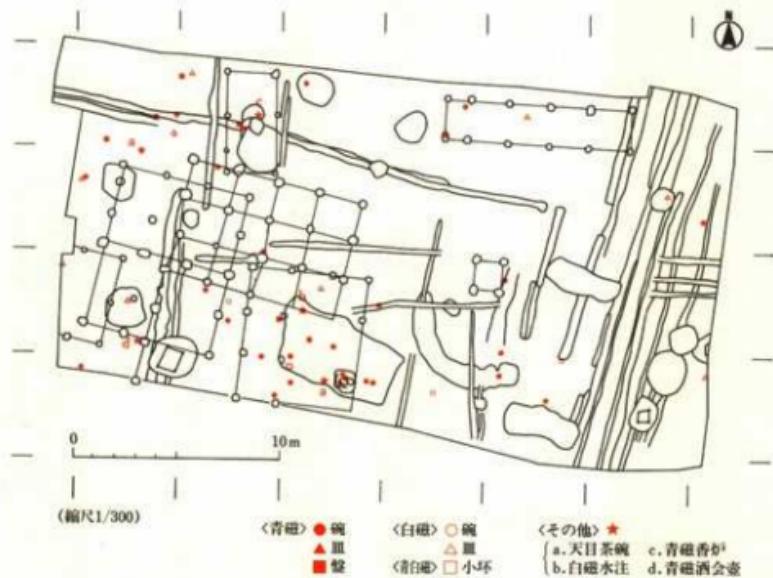
第202図 AT 95 中世遺物の出土散布図(破片数、第Ⅰ層を除く)



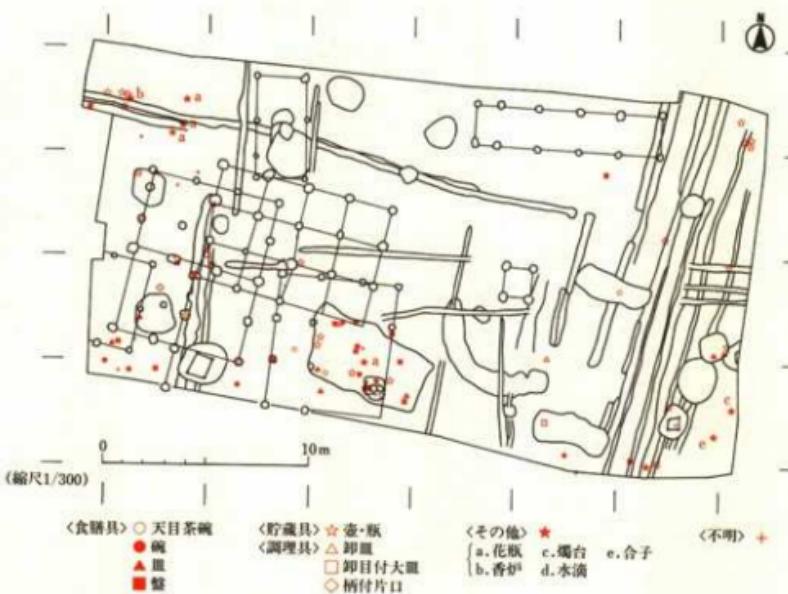
第203図 AT 95 鉄製品の出土散布図(重量、第Ⅰ層を除く)



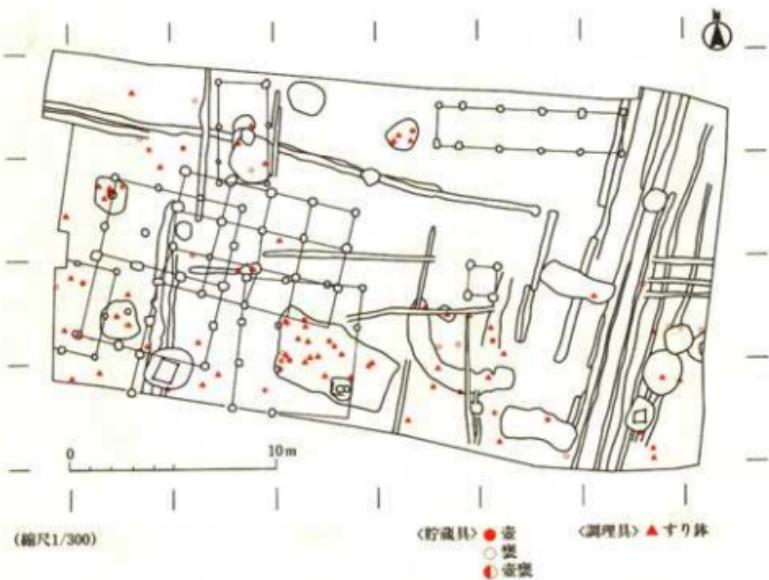
第204図 AT 95 中世遺物の接合関係



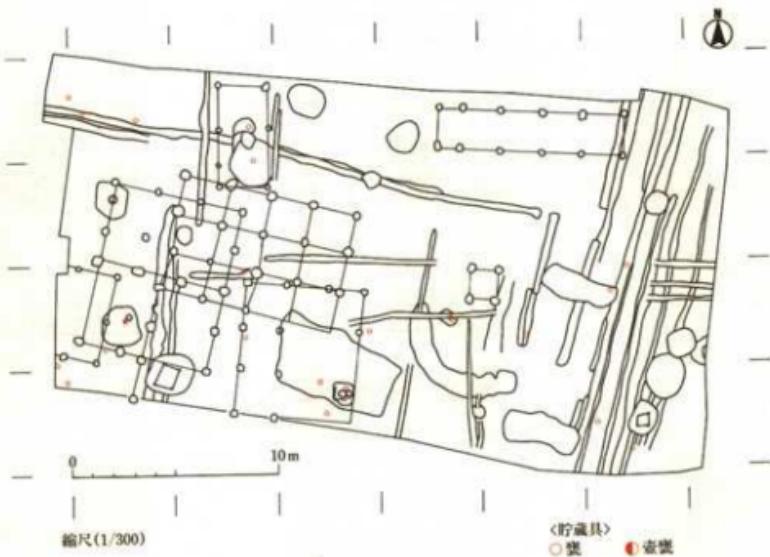
第205図 AT 95 貿易陶磁の出土散布図(破片数、第I層を除く)



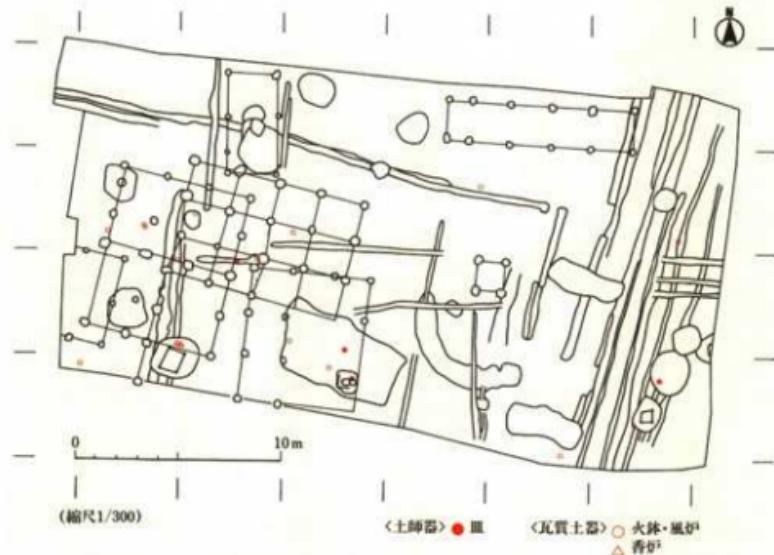
第206図 AT 95 窓戸の出土散布図(破片数、第I層を除く)



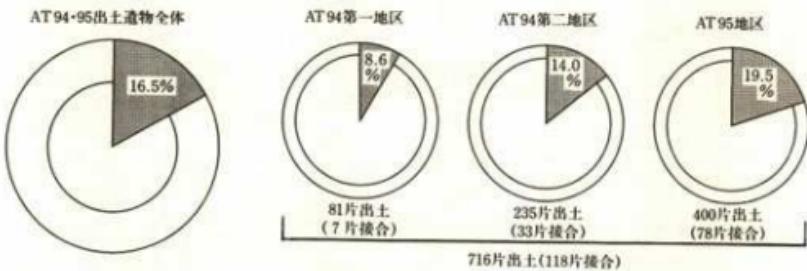
第207図 AT95 珠洲の出土散布図(破片数、第1層を除く)



第208図 AT95 壺器系陶器の出土散布図(破片数、第1層を除く)



第209図 AT 95 土師器・瓦質土器の出土散布図(破片数、第I層を除く)



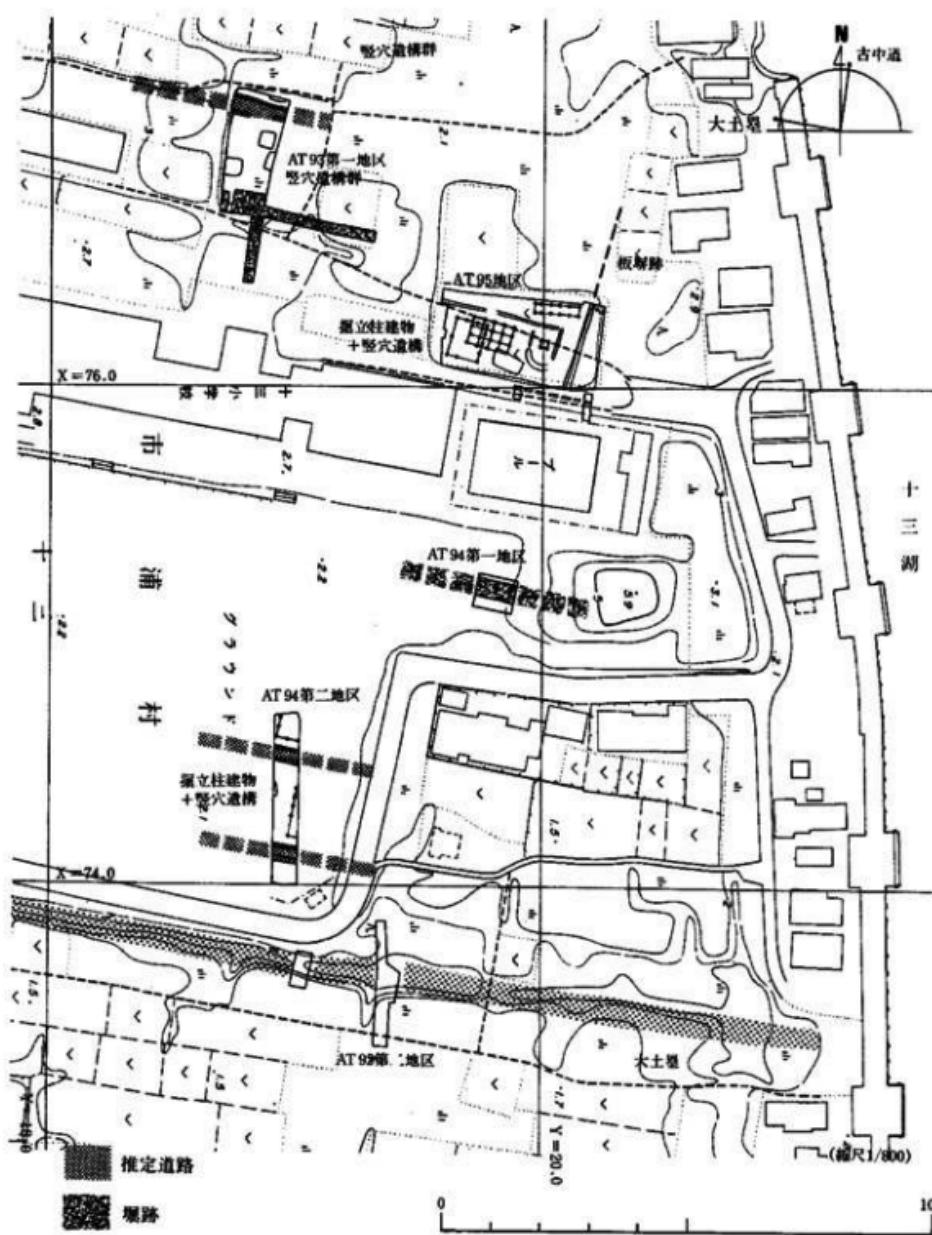
第210図 中世遺物の接合率

## VII まとめと課題

第1次・第2次調査の要点についてまとめるに、以下のようなになる。

①第1次調査（AT94）は国立歴史民俗博物館による復元想定図をもとに推定された中世十三湊の中心施設（推定安藤氏館）の存在を確認する調査を実施した。調査は十三小学校内に2ヶ所のトレンチ区をもうけ、館跡の範囲確認を目的とした。調査の結果、第一地区において館を区画すると推される堀SD03を検出した。この堀は上端幅2.2m～2.5m、下端幅2.1m～2.3m、深さ30cm～40cmの規模を有し、東西方向に渡ってのびている。第二地区では区画遺構1・2としたそれぞれ2時期の変遷をもつ柵囲区画の東西道路敷と推される遺構が検出された。両地区的成果を考慮すると、検出された堀SD03はその北側に想定される館を区画する南堀であると推定することが可能となった。さらに堀と十三湊を南北に分断する大土塁の間には柵囲区画の道路敷が東西方向に渡ってのびている。さらに、その柵囲区画の道路敷に挟まれた空間には多数の柱穴群、土坑、井戸が検出されていることから、掘立柱建物に井戸を伴う屋敷地としての居住空間が想定される。また、多くの小規模な土坑が作られていることから、当地が生活空間として活発に利用されていたことが伺える。検出された堀と柵囲区画の道路敷の主軸方位は十三湊を南北に分断する大土塁と方位を平行していることから、これらは中世十三湊の計画的な遺構配置時期に構築された一的なものと推される。

②第2次調査（AT95）は第1次調査の成果を受け、十三小学校北側の畠地を選定し、実施した。調査の結果、調査区が最盛期には館跡主体部となる場所であることが分かった。内部は溝、柵・堀によって区画された空間内に掘立柱建物、大型竪穴遺構、井戸を配置している。ここでは多くの遺構の重複が見られ、段階的な遺構変遷の理解を可能にしている。詳細は第VI章考察を参照のこと。ここで注目されるのは中世十三湊の初源を示す12世紀後半代の遺構が検出されたことである。それはSB07の1間×1間（1.37m×1.37m）の掘立柱建物とSD03の葺石を伴った周溝が一体となった宗教建築遺構で、本地区が中世十三湊の成立当初から重要な意味を持つ場所であったと考えられる。また、これまで十三湊を南北に分断する大土塁の北側地区において、都市計画的な遺構の配置時期を14世紀後半以降に求めていたが、今回の調査によって、さらに13世紀代まで遡ることが明らかとなった。主要な遺構ではSB01の総柱建物にSE10井戸を伴う配置が区画された空間内に見られる。



第211図 十三小学校地区の中世造構概略図

以上、第1次・2次調査分をまとめてみたものの、調査面積が狭いこともあって限られた情報のために、推測の域を出ないものが多いのは事実である。今後の調査面積の拡大を待って、再度検討していきたい。

十三塹遺跡は55万m<sup>2</sup>にわたる大規模な遺跡である。今回はその1地点に過ぎない館跡の確認調査であるが、館跡を区画する土塁などが地表面に痕跡として残されていれば館の範囲は捉えやすいが、土地の地割りから館の範囲がある程度推測されているに過ぎないため、広い面積を発掘調査しなければ、その正確な館の実態を掴むことは到底容易ではない。狭い調査面積の中で、限られた情報をいかに正確に把握し、遺跡全体の中で位置づけをおこなっていくかは非常に注意を要しなければならない今後の課題である。

またその他に、今後に残された問題点は多々あり、以下に列挙してまとめとしたい。なお、来年度以降も「十三小学校地区」の館跡（推定安藤氏館）の確認調査を継続的に進め、その実態解明を行っていきたい。

①在地土器が存在せず、遺構の年代を搬入陶磁器による年代決定に頼らなければならないこと。また、遺構出土の一括資料が極めて乏しい状況であることから、細かな遺構の年代観の決定が困難である。よって、段階的な遺構の変遷を捉えることは非常に難しい状況にある。

②第1次調査（AT94）・第一地区で検出された堀SD03の築造時期については明らかでないが、堀の築造時期は館の成立を示す重要な意味を持っている。SD03の主軸方位から十三塹の都市計画段階にはすでに成立していたことは明らかである。しかし、第2次調査（AT95）によって十三塹の都市計画的な遺構配置時期が13世紀まで遡ることが明らかとなり、堀の築造もこれに対応した時期と考えることもできるが、これを明らかにする考古学的事実はなく、現時点では保留として、今後の課題としたい。

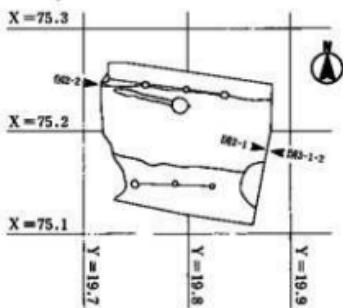
③調査に関して、遺跡が砂州上に立地していることから、長期間にわたる遺構検出から発掘作業までの間に、遺構が風化、崩壊、変形したりしてしまうといった特殊事情がある。緻密な記録保存を必要とする発掘調査は長期間を要する。広い面積の発掘調査はさらに長期間に及ぶため、前述のような事情から事实上不可能と言える。

## 引用・参考文献

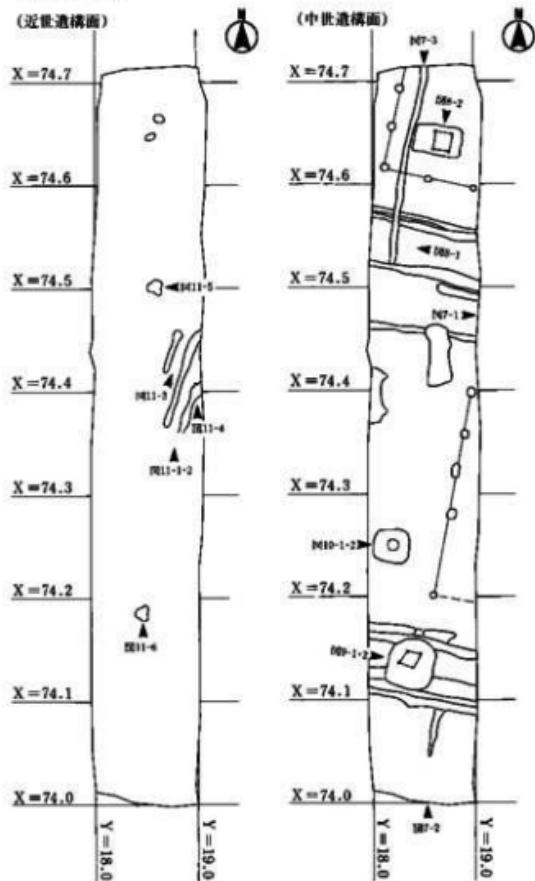
- 村越 澤 1975 「十三琴湖岳遺跡」『日本考古学年報』第26号
- 宇野隆夫 1981 「遺物の考察」「白河北殿北辺の調査」京都大学埋蔵文化財調査報告II  
京都大学埋蔵文化財研究センター
- 平凡社 1982 『青森県の地名』日本歴史地名大系2
- 藤澤良祐 1982 「古瀬戸中期様式の成立過程」「東洋陶磁」VOL.8 東洋陶磁学会
- 豊島勝藏 1984 『市浦村史』第1巻 市浦村教育委員会
- 小野正敏 1984 「第4回貿易陶磁研究集会、その成果と課題」「貿易陶磁研究』No.4
- 穴水町教育委員会 1987 『西川島 能登における中世村落の発掘調査』
- 福田友之 1988 「十三湖周辺地域の考古学的研究の現状と課題」「総合研究津軽十三湖」  
北方新社
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1990 『多賀城跡』
- 藤澤良祐 1991 「瀬戸古窯址群II～古瀬戸後期様式の編年～」「研究紀要」瀬戸市歴史民俗資料館
- 小野正敏 1991 「城館出土の陶磁器が表現するもの」「中世の城と考古学」新人物往来社
- 宇野隆夫 1992 「食器計量の意義と方法」「国立歴史民俗博物館研究報告書」第40集
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 1993 「草戸千軒町遺跡発掘調査報告～北部地域  
北半部の調査～」
- 青森県八戸市教育委員会 1993 「根城 一本丸の発掘調査－」
- 永井久美男編 1994 「中世の出土銭～出土銭の調査と分類～」兵庫埋蔵銭調査会
- (財)富山県文化振興財団 1994 「梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告書(遺構編)」  
富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告書第5集
- 吉岡康暢 1994 「中世須恵器の研究」 吉川弘文館
- 国立歴史民俗博物館 1994 「中世都市十三湊と安藤氏」新人物往来社
- 国立歴史民俗博物館 1994 「日本出土の貿易陶磁 東日本編1」国立歴史民俗  
博物館資料調査報告書5
- 国立歴史民俗博物館 1995 「国立歴史民俗博物館研究報告」第64集
- 藤澤良祐 1995 「瀬戸古窯址群III～古瀬戸前期様式の編年～」「研究紀要」第3輯  
(財)瀬戸市埋蔵文化財センター
- 神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1995 「江馬氏城館跡 一下館跡発  
掘調査報告書I-」

## 図 版

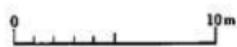
AT94 第一地区



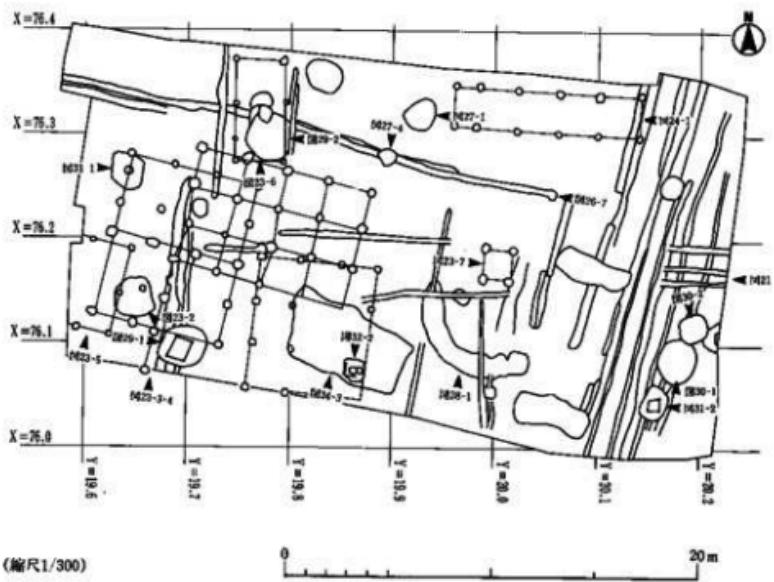
AT94 第二地区



(縮尺1/300)



AT95 調査区

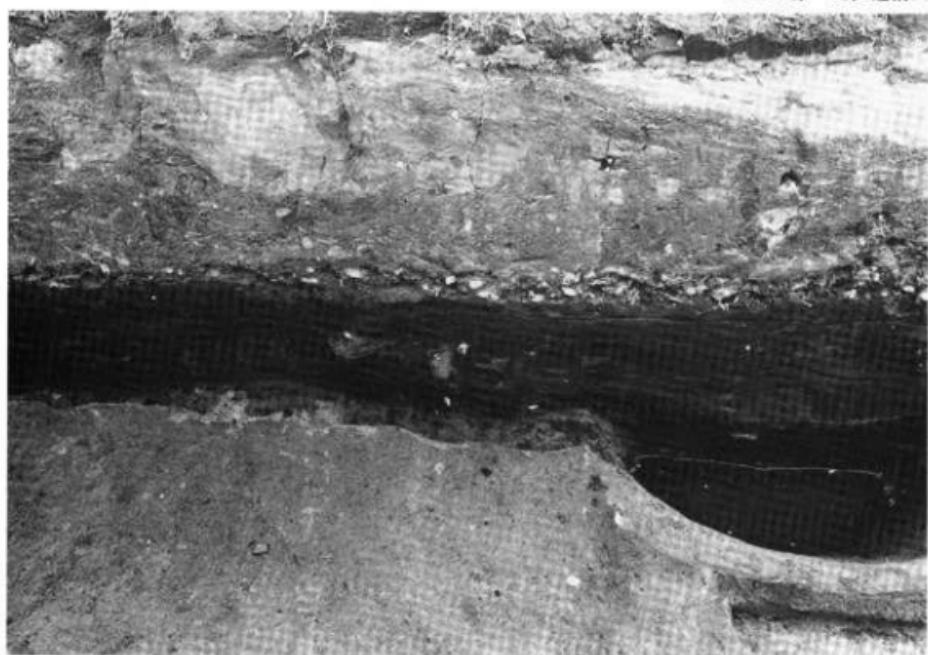




1 市浦村の地形・十三湊遺跡と福島城（北から）



2 調査地点と周辺地形



1 調査区東壁断面層位（西から）



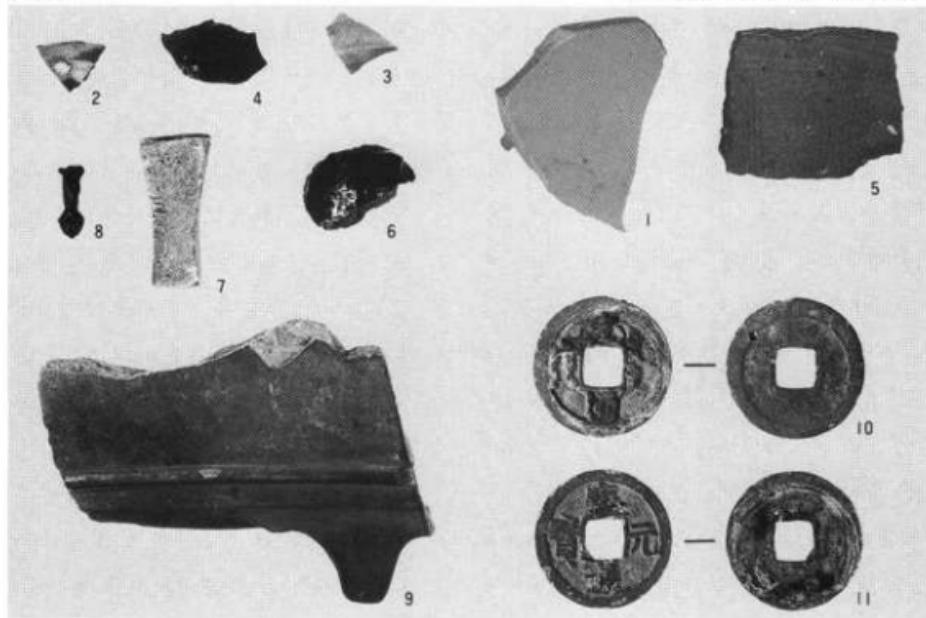
2 S A 01・S A 02（西から）



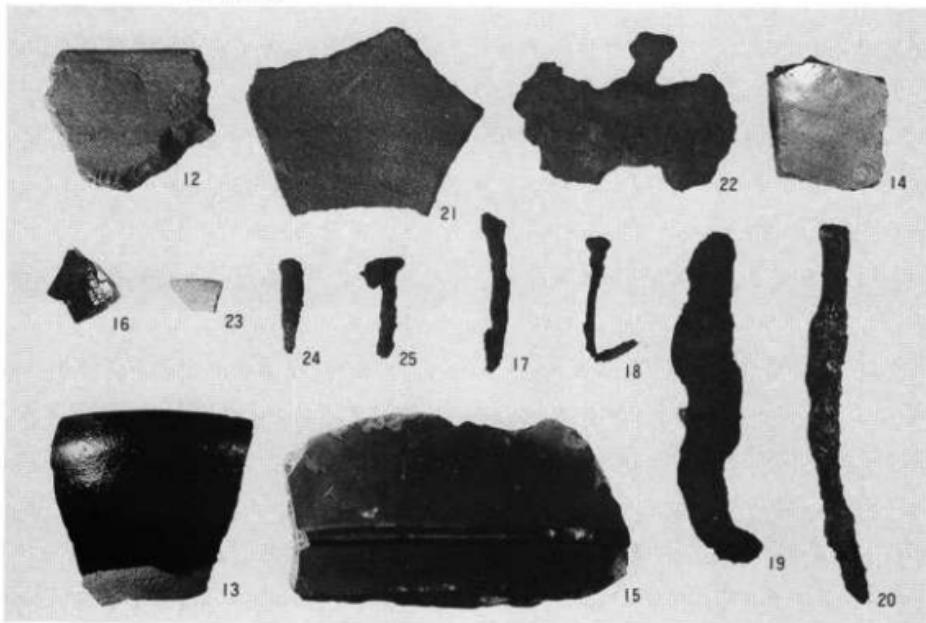
1 遺構検出状況・S D 03（東から）



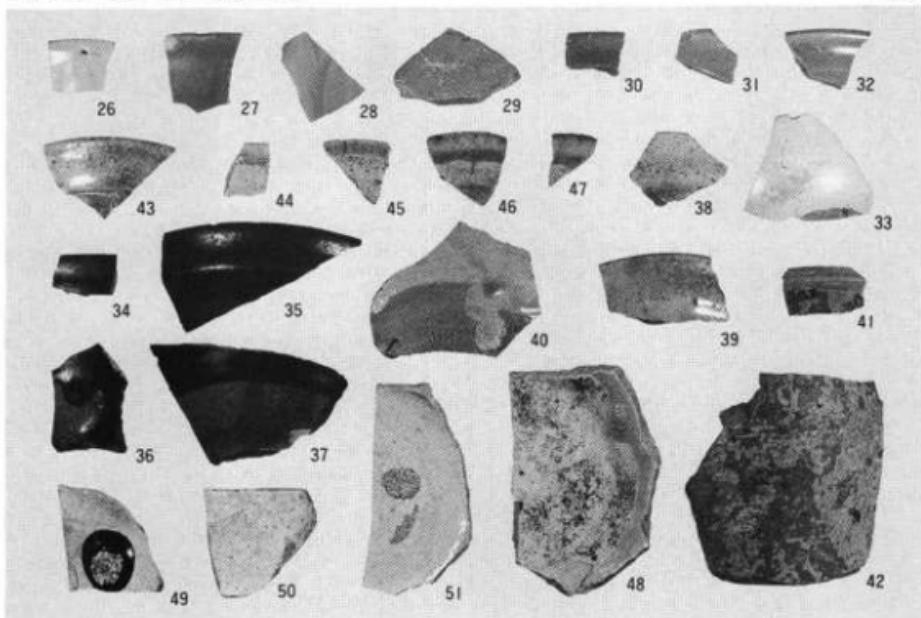
2 遺構発掘状況・S D 03（東から）



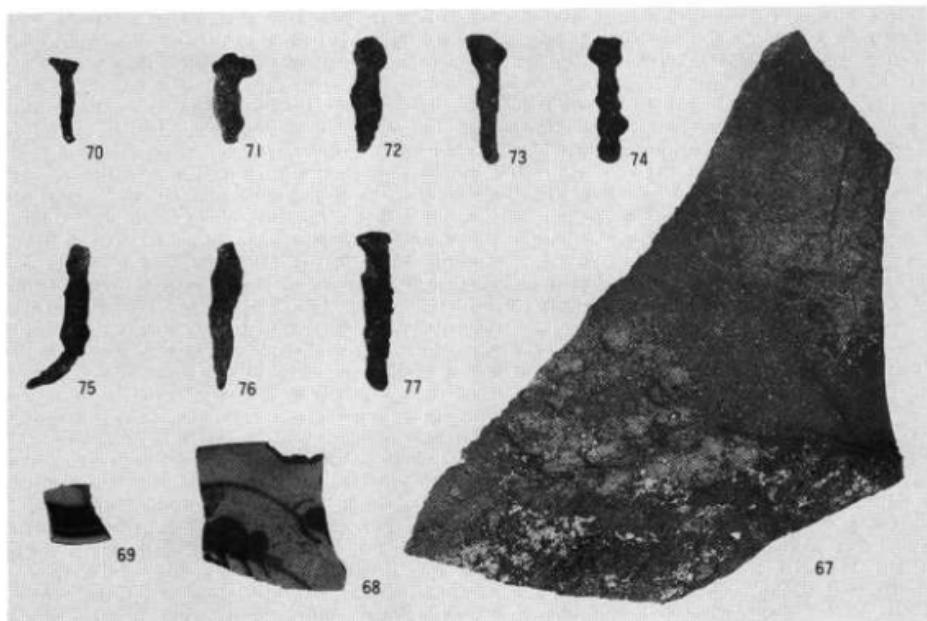
S D 03 (1~11): 1 青磁, 2・3 濑戸, 4 褐釉, 5 珠洲, 6 羽口, 7 砥石, 8 鉄釘, 9 瓦質土器,  
10・11 古銭



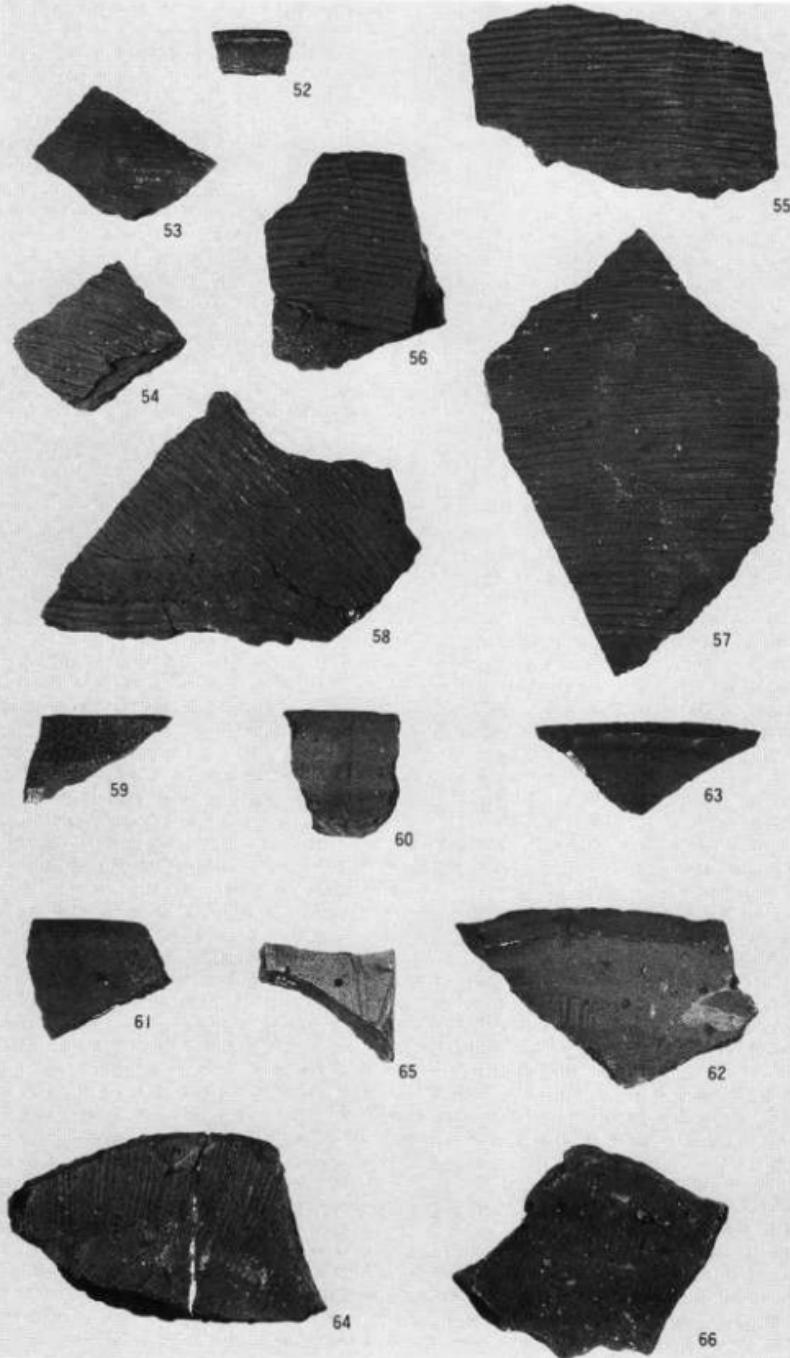
S A 01 (12), S K 07 (21・22), S K 08 (23~25), S P 13 (17), S P 14 (13), S P 15 (18・19),  
S P 72 (14), S P 73 (15), S P 82 (16);  
12・21 珠洲, 13・14・16・23 濑戸, 15 瓦質土器, 17・18・20・24・25 鉄釘, 19 錠, 22 鉄滓



包含層：26～32青磁，33白磁，34～51瀬戸

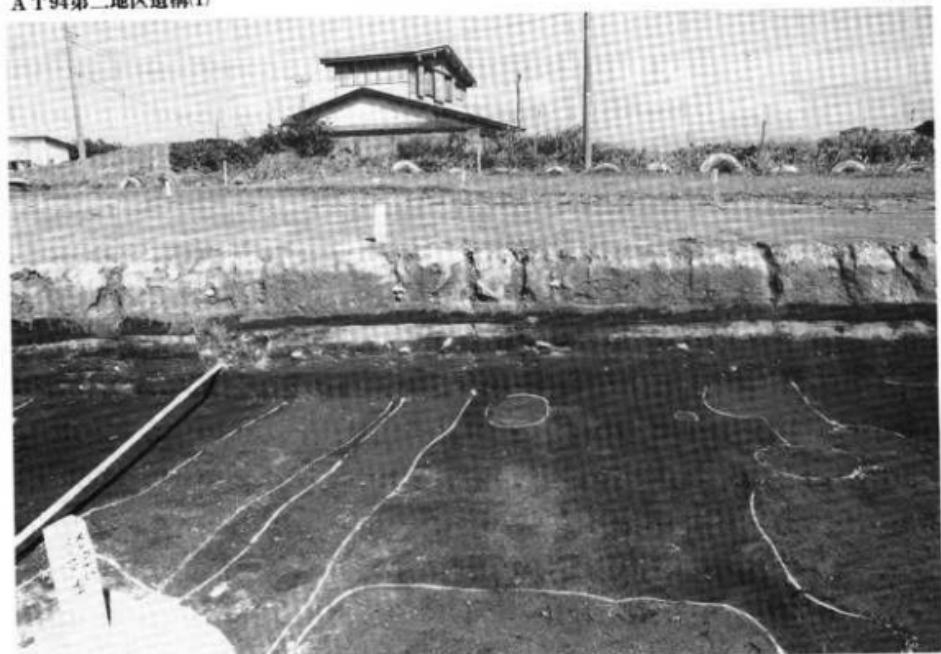


包含層：67壺器系，68・69肥前（系），70～77鐵釘



包含層：52～66 珠洲

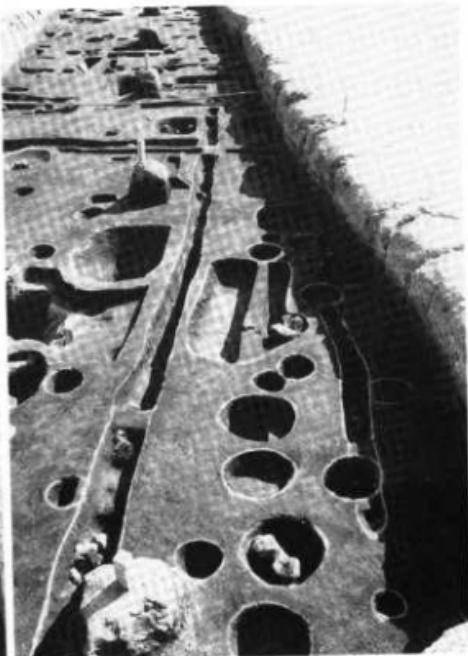
A T 94第二地区遺構(1)



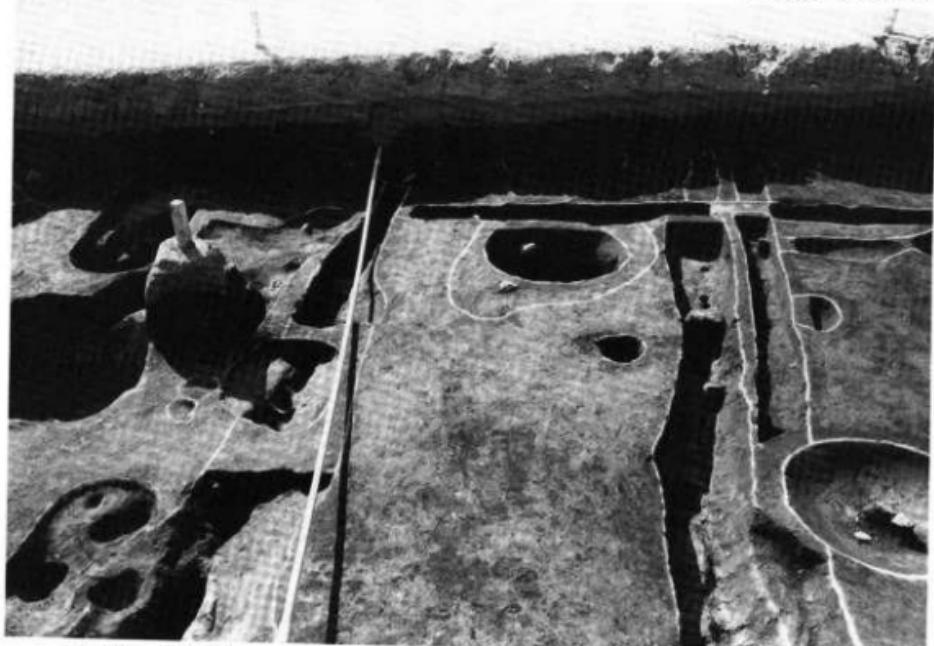
1 調査区東壁断面層位（西から）



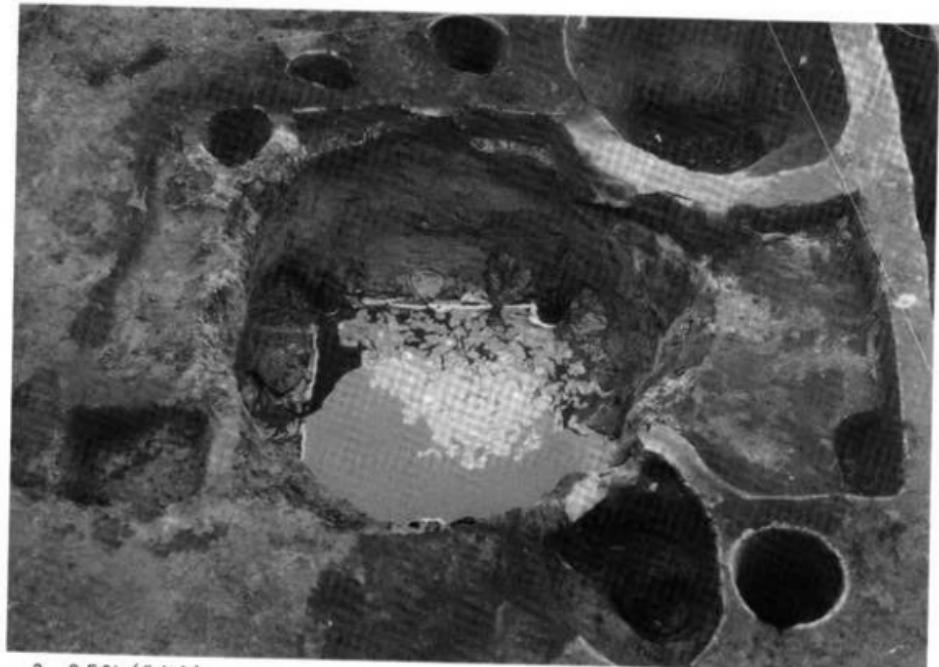
2 遺構完掘状況（南から）



3 S A 01 (北から)



1 区画遺構 I (東から)



2 S E 01 (北から)

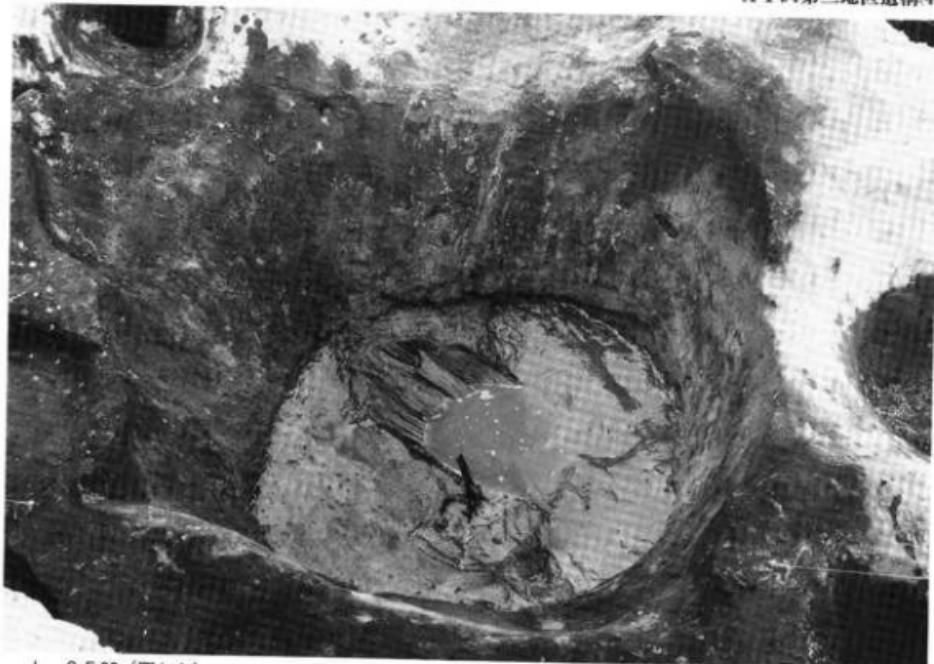
A T 94第二地区遺構(3)



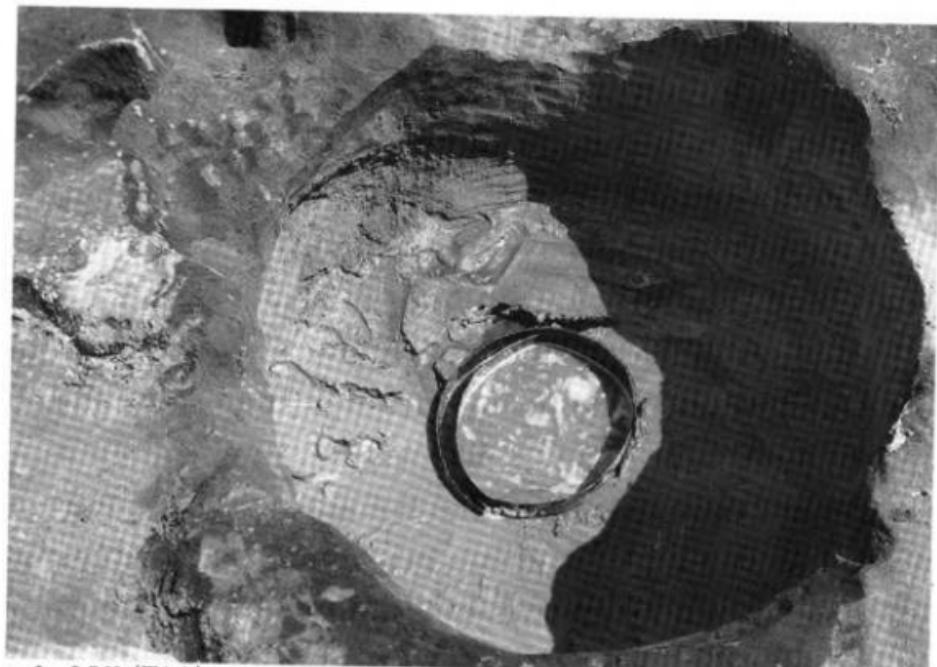
1 区画遺構 2・S E 02 (西から)



2 S E 02 (西から)



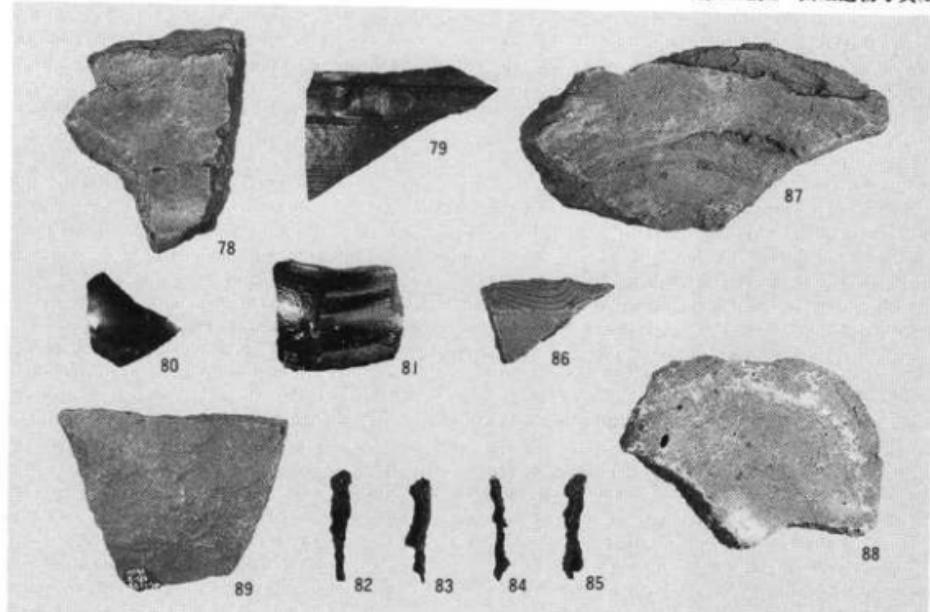
1 S E 03 (西から)



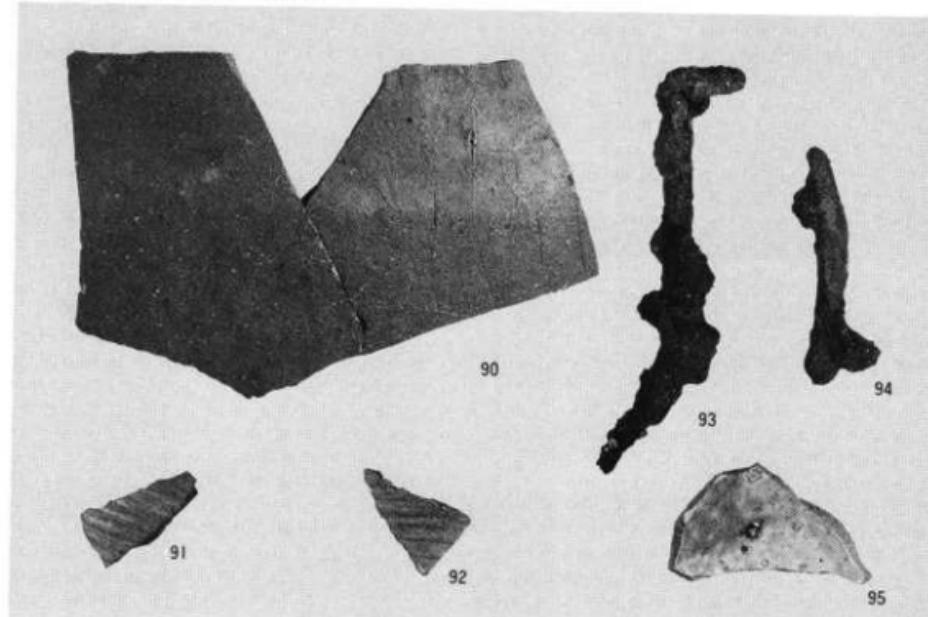
2 S E 03 (西から)



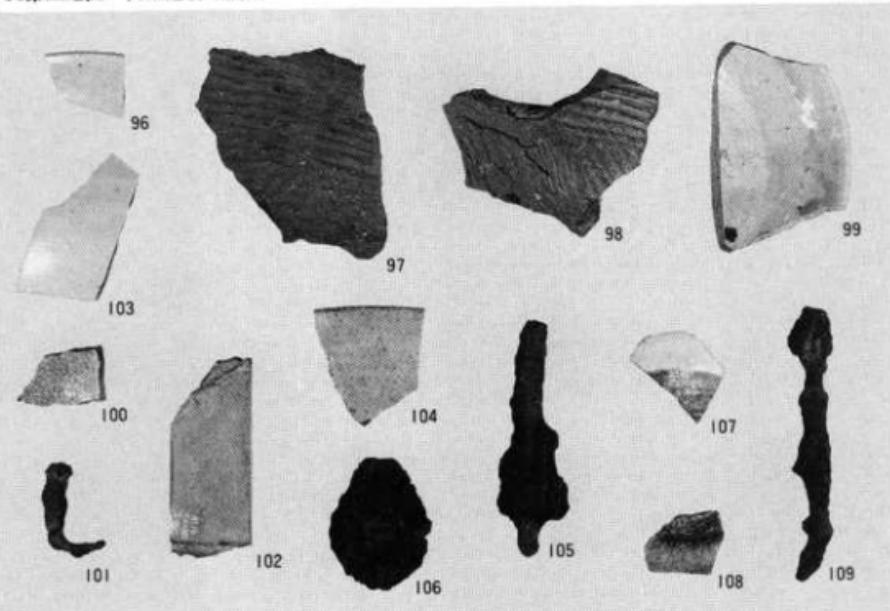
1 近世遺構検出状況(南から), 2 近世遺構発掘状況(南から), 3 SD 01・02集石(南から),  
4 SD 03集石(南から), 5 SX 01集石(東から), 6 SX 02集石(南から)



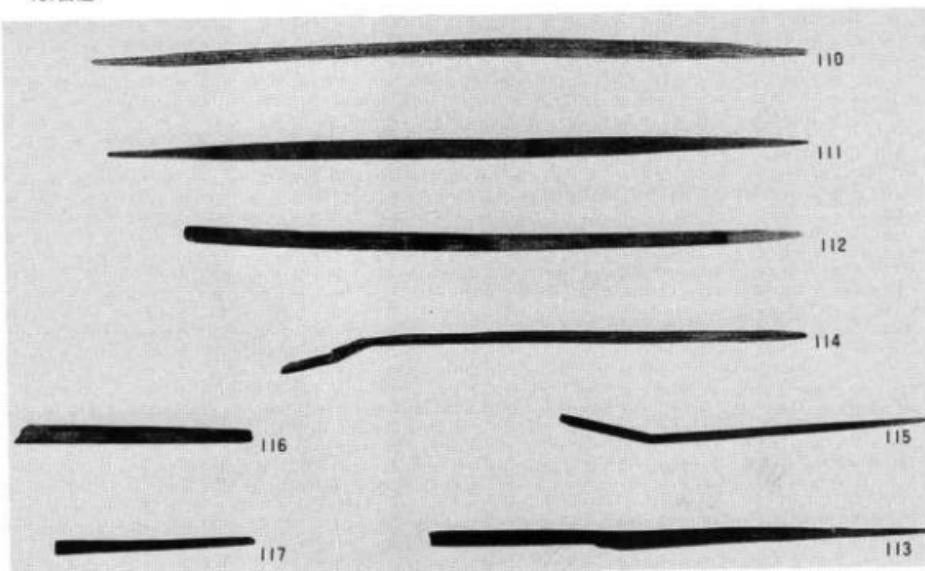
近世遺構：SD01 (80～85), SD02 (86～89), SX01 (78・79) : 78・86～88珠洲, 79・81近世陶器, 80近世漁戸, 82～85鉄釘, 89瓷器系



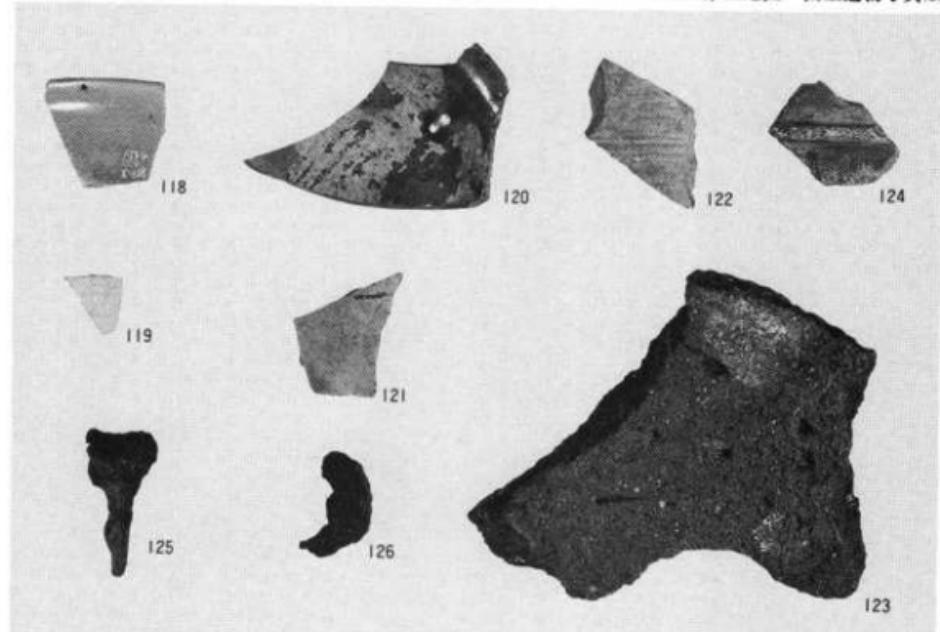
SA12 (90), SP01 (91・92), SP58 (93), SP63 (94), SP112 (95) : 90瓷器系, 91・92珠洲, 93・94鉄釘, 95漁戸



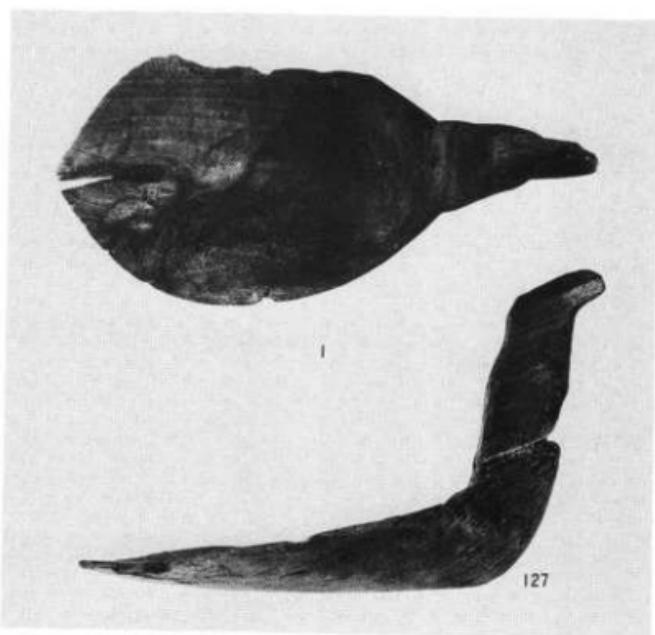
S I 01 (96), S A 01 (100~102), S A 03 (97·98), S A 07 (103), S A 08 (104~106), S A 09 (107·109), S A 10 (99) : 96·103青磁, 97·98珠洲, 99·100·104·108漁戸, 101·105·109鉄釘, 106砥津 ?, 107白磁



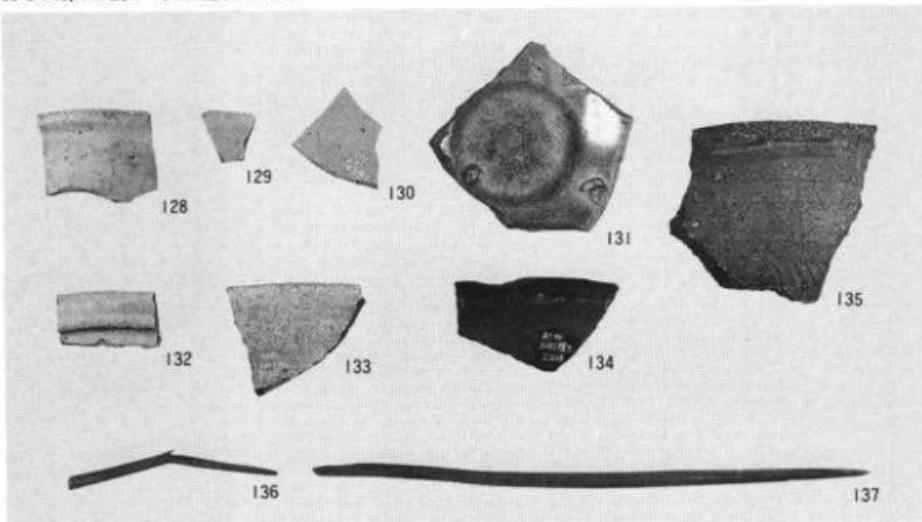
S E 01 : 110~117木製品 (箸)



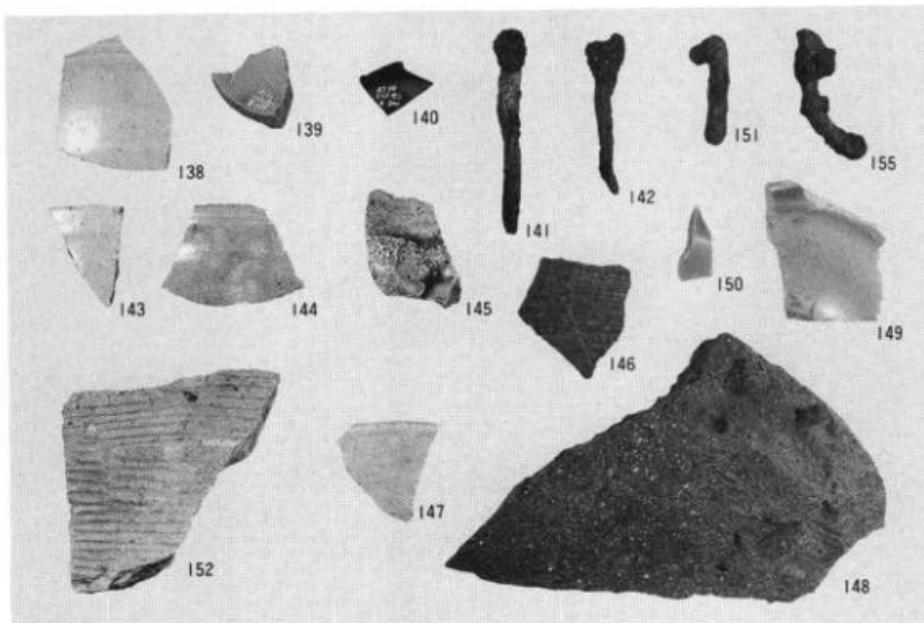
S E 02 (118~126) : 118青磁, 119白磁, 120~122瀬戸, 123珠洲, 124瓦質土器, 125・126鉄釘



S E 02 : 127木製品 (杓子)



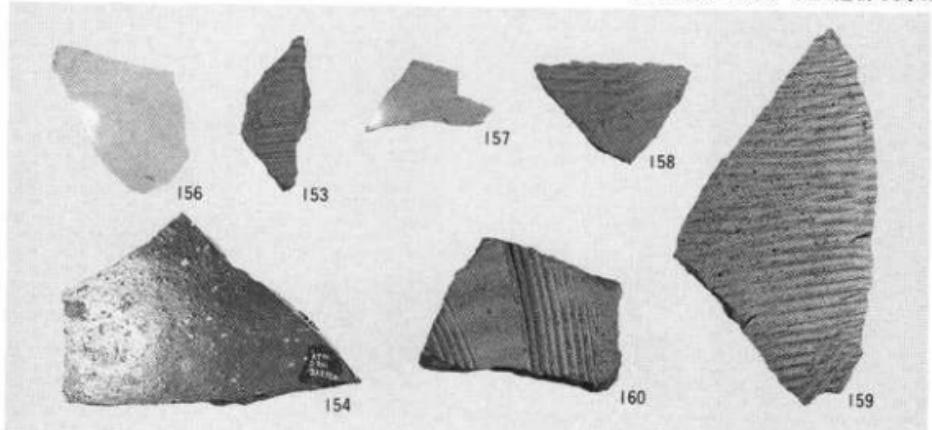
S E 03 (128~137) : 128~130青磁, 131~133漁戸, 134・135珠洲, 136・137木製品 (著)



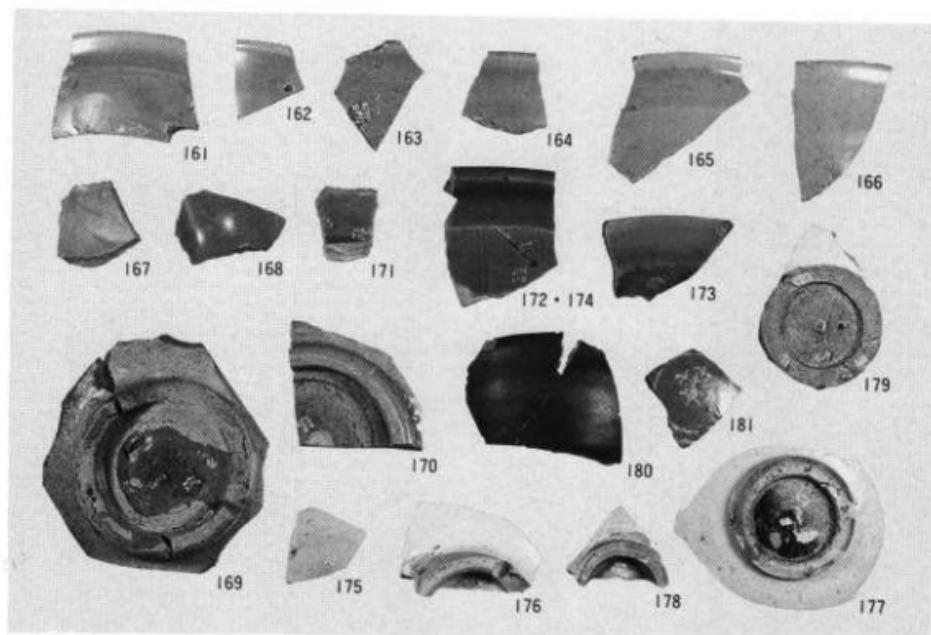
S K 09 (138~142), S K 10 (143~146), S K 11 (149~150), S K 19 (151), S K 25 (152), S K 32 (155),

S K 33 (147・148) :

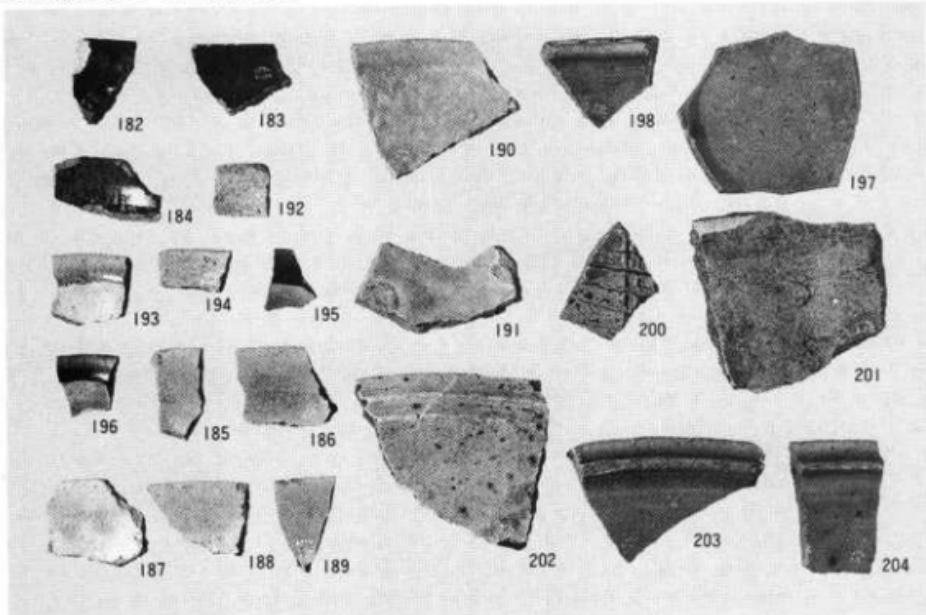
138・139・149・150青磁, 140中国製鉄釉茶入, 141・142・151・155鉄釘, 143~145・147漁戸, 146・152珠洲, 148瓷器系



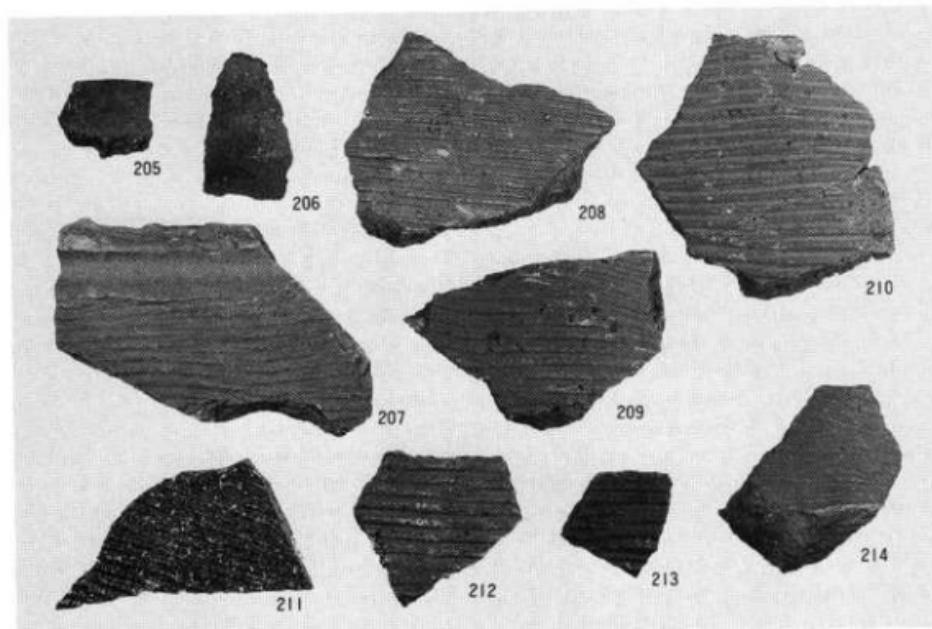
S K 34 (156), S K 37 (153), S K 38 (157 + 158), S K 39 (159), S K 43 (160), S K 46 (154):  
153 + 158~160珠洲, 154信楽, 156 + 157青磁



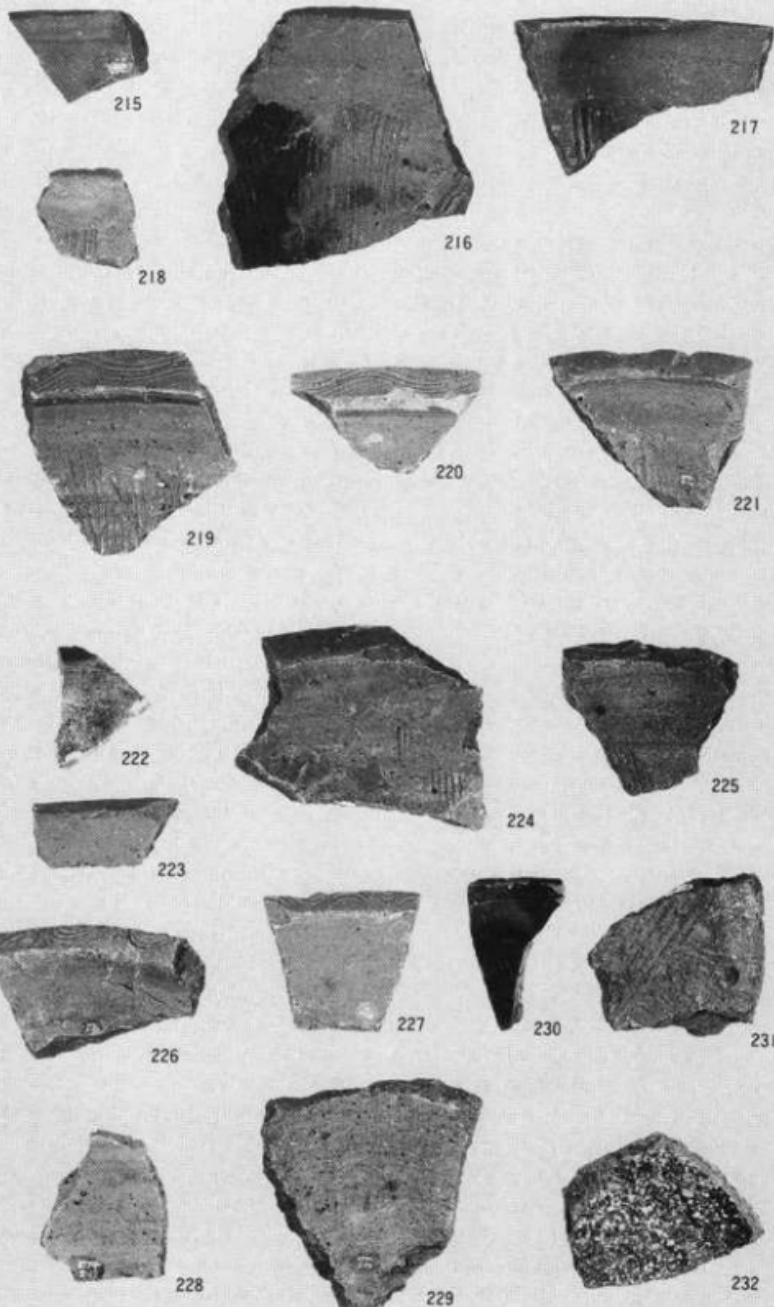
包含層：161~174青磁, 175~179白磁, 180中国製天目, 181高麗青磁碗



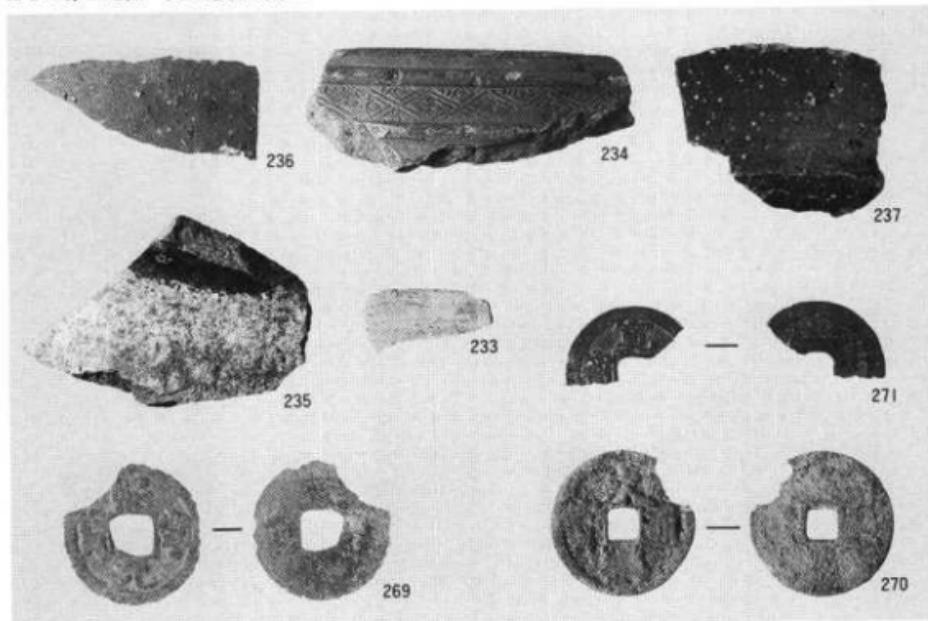
包含層：182～198・200～204 濱戸



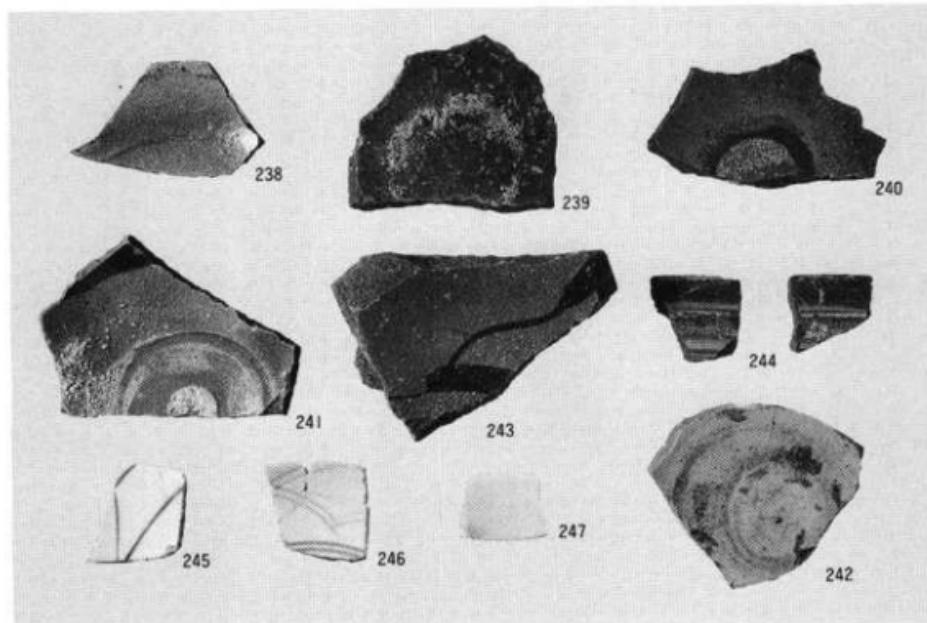
包含層：205～214 珠洲



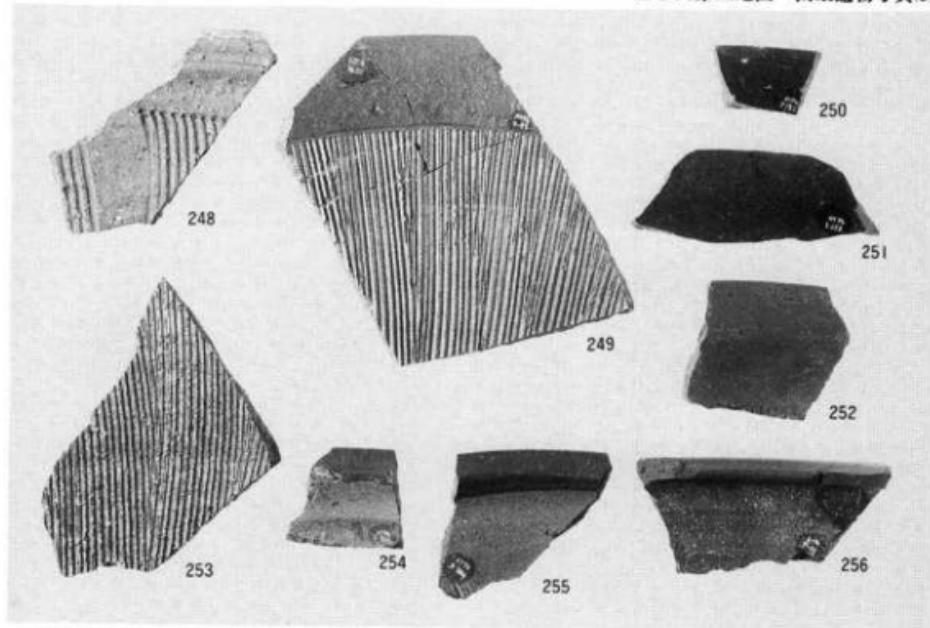
包含层：215~232珠洲



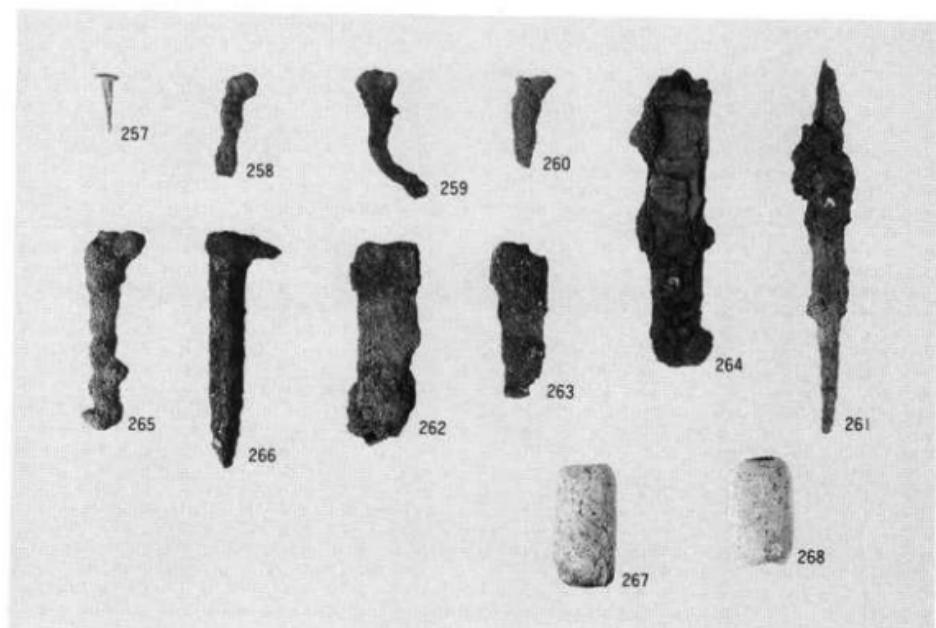
包含層：233土師器，234瓦質土器，235壺器系，236・237信楽，269～271古銭



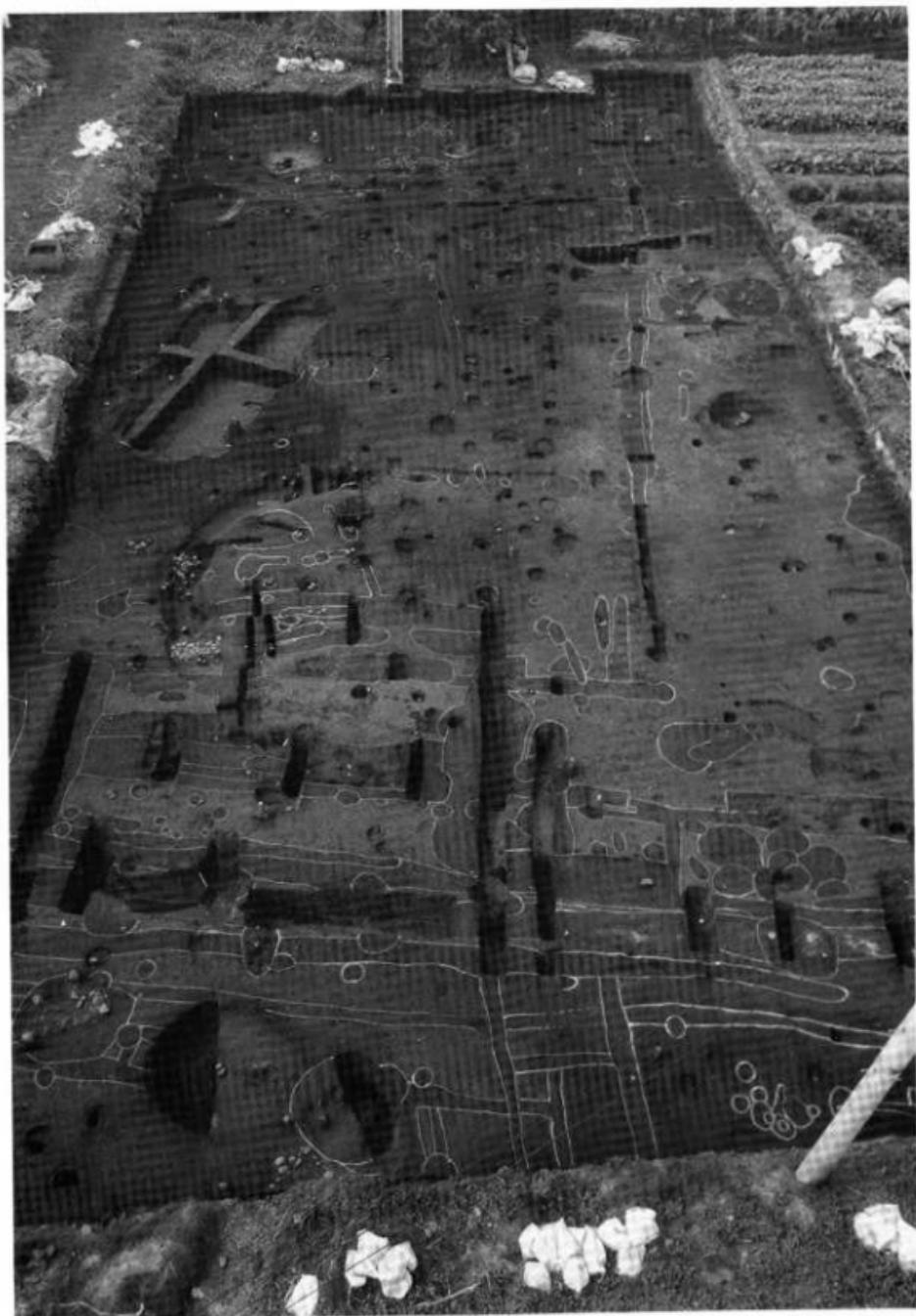
包含層：238～244近世陶器，245～247近世磁器



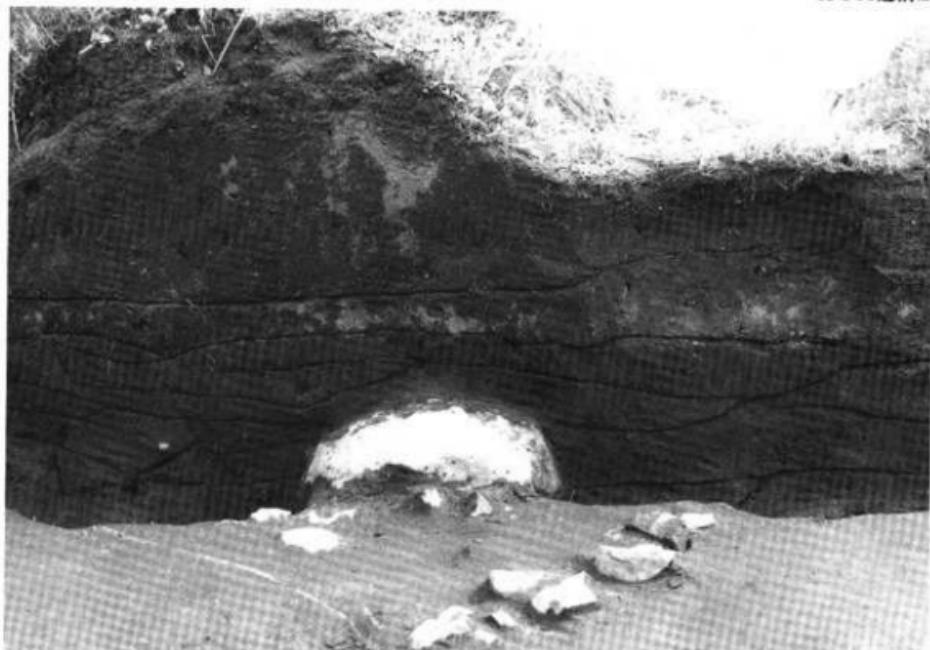
包含層：248～256近世陶器（248備前）



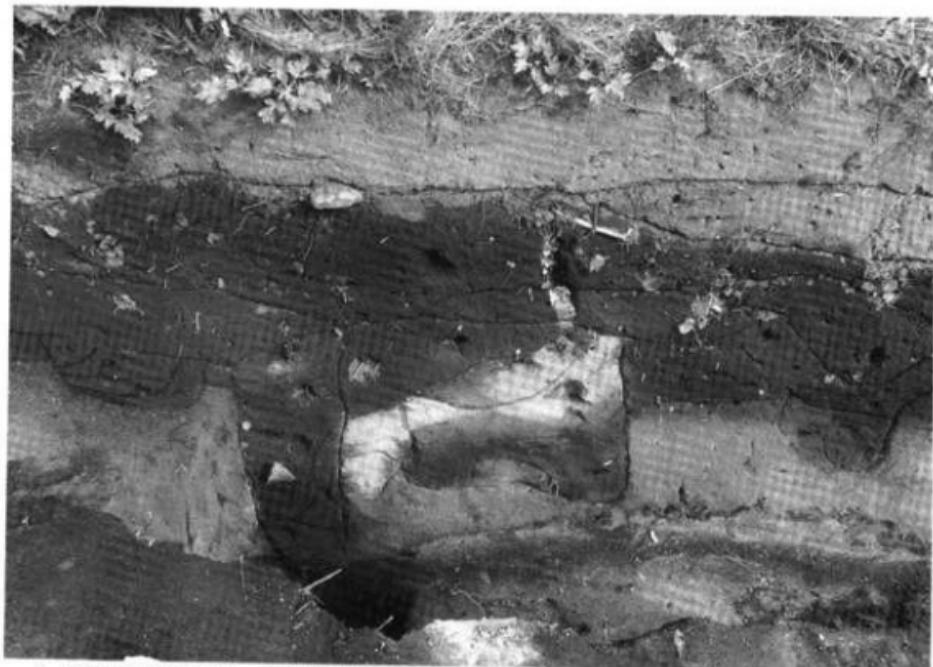
包含層：257銅製品（鉛），258～260・265・266鉄釘，261鉄鎖，262～264鎌，267・268土鍤



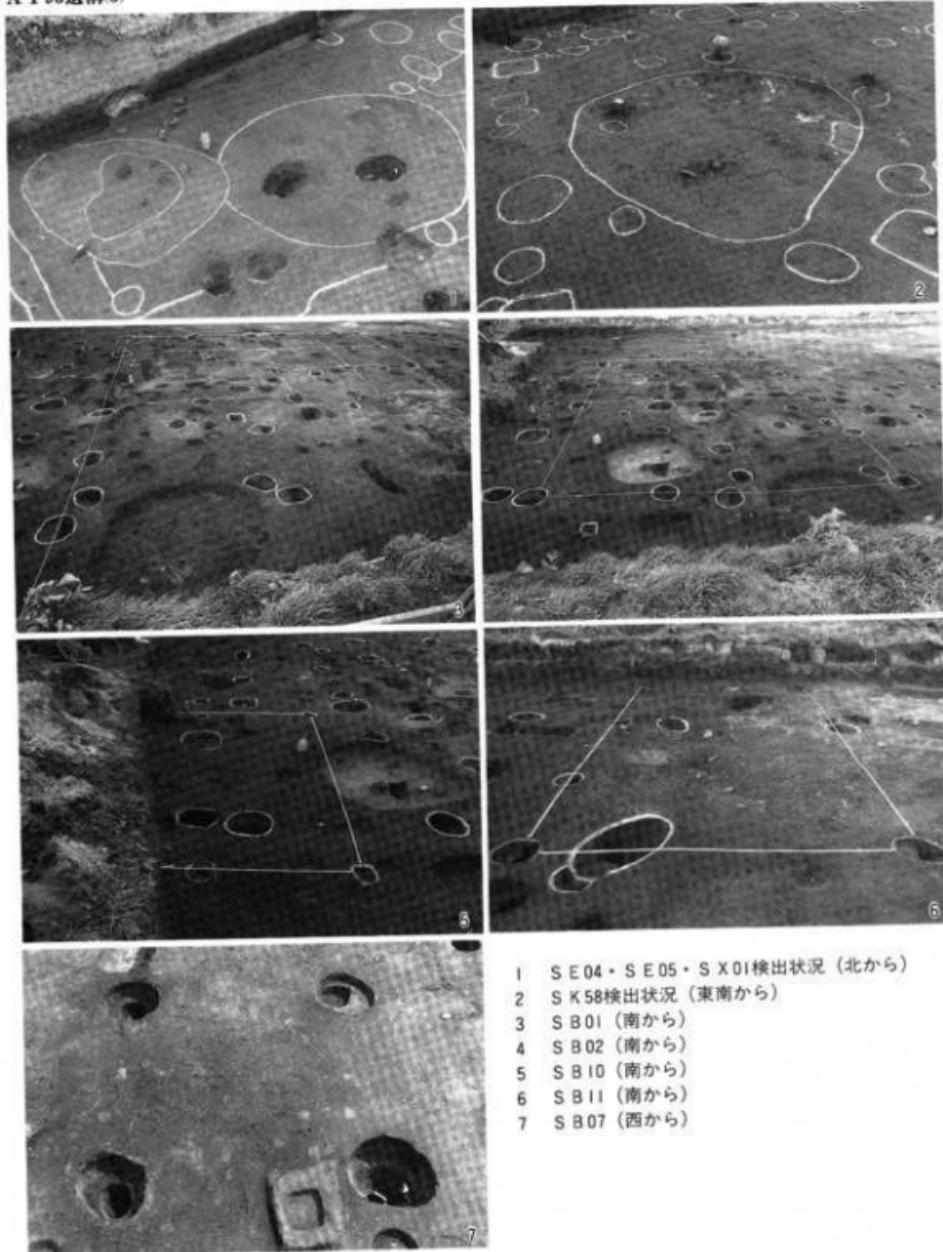
調査区全景（東から）



1 調査区東壁断面層位・S X01 (西から)

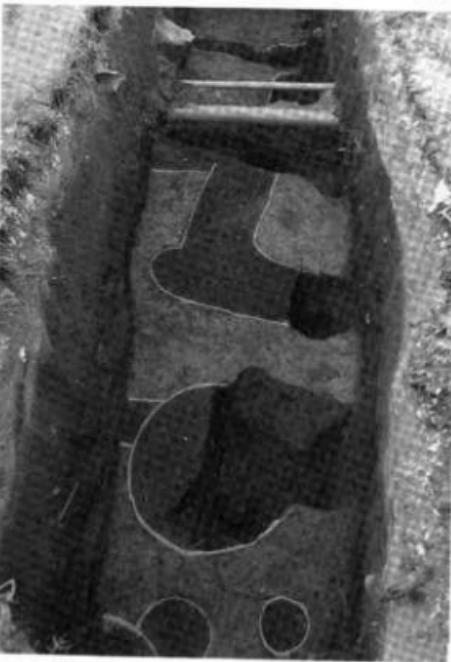


2 調査区北壁断面層位・S D01部分 (南から)

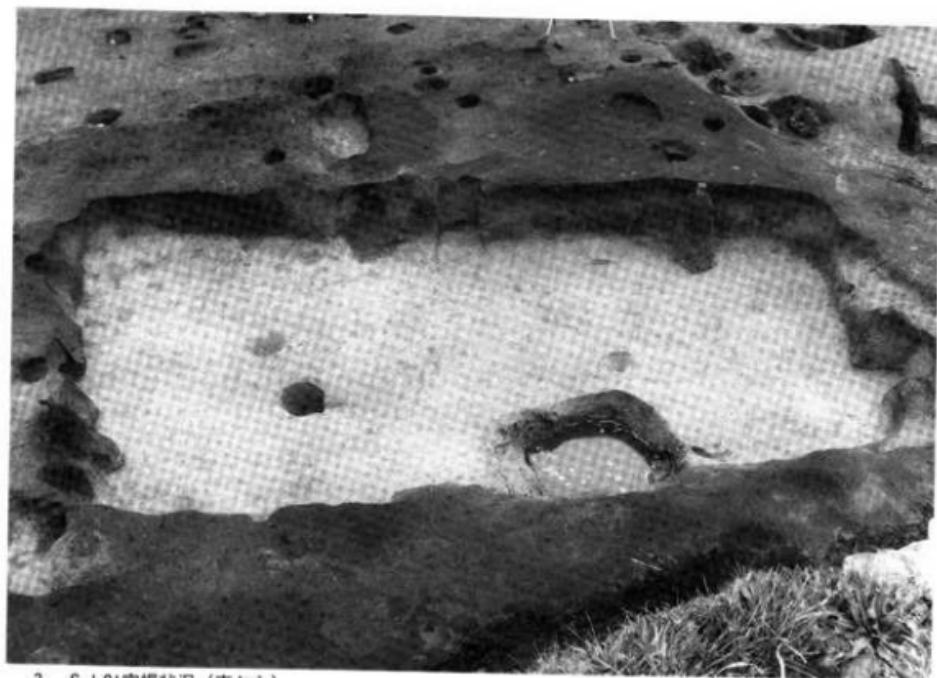




1 S B 08 (東から)



2 拡張トレンチⅠ (北から)



3 S I 01完掘状況 (南から)